
魔法少女リリカルなのはStrikerS でいてくといふ!!

ドナドナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのはStrikers でいてくいていぶ！！

【Nコード】

N9277U

【作者名】

ドナドナ

【あらすじ】

別世界への行き来が可能になった第一管理世界ミッドチルダ。別世界の技術によりミッドチルダの技術は飛躍的に上昇し、治安を納めている警察の名も管理局へ変わった。探偵業など仕事にならない、そんなご時世。ひとり探偵事務所を営む残念な男、ガジル・アルタレッタは今日も大人向けの雑誌を片手に事件へ挑む！ドナドナの完結済み作品魔法少女リリカルなのはStrikers 炎の刃々から生まれたスピノフ作品！！更新は作者の気分次第不定期更新！

依頼No.1 地獄絵図展開（前書き）

どうもドナドナと申します

この作品はドナドナの完結済み作品魔法少女リリカルなのはStrikerSの炎の刃から生まれたスピノフ作品です。

この作品で本編に興味を持たれた方は駄文ですが本編も読んでくれると嬉しいです。

それでは、依頼No.1をどうぞ。感想ご指摘大歓迎です

依頼 No. 1 地獄絵図展開

第1管理世界ミッドチルダ

そのミッドチルダの都市、クラナガンにある一軒の事務所。

見るからに年期の入ったお世辞にも綺麗とは言えない二階建ての事務所。

一階は何やら危なげな臭いを漂わせるスナック

二階は特に変わった様子もなくひっそりとしている。

強いて変わったところを上げるとすれば、アルタレッタ探偵所と漢溢れる太い文字で書かれた看板を下げているだけである

そう。此処はクラナガンの数少ない探偵所、アルタレッタ探偵所。

一昔前、此処クラナガンでは探偵業とやらはそう少なくなかった。何かもめ事があれば警察じゃなくて探偵に頼りな。

それほど探偵は信頼を得ていた

しかし、ピタリと探偵の信頼は途絶える

理由、それはこの世界の誰かが異世界への移動を可能にするというバカげた開発に成功したからだ。

そのお陰で各世界から集められた技術により警察一人一人に情報を管理もでき、武器としても利用できる携帯端末デバイスが配られ名称を警察から管理局へと変えた。

管理局の技術は最先端。

一端の探偵が技術の粋を集めたとしても到底太刀打ちできるレベルではない。

そして何時しか探偵という名は薄れていった。

そんな中、探偵所の玄関に一人の女性が立っていた。純度の低いピンク色の髪をポニーテールにした凜とした顔の持ち主。服装は管理局の制服を着ていることから管理局の者だと思われる。バストは見たところ。おっと女性が呼び鈴を鳴らしたようだ。

数十秒後現れたのは無気力全快の顔をした見るからに冴えない男。服装はボタンが全て開けてあるYシャツとパンツだけという地獄のような組み合わせ。いや、Yシャツとパンツだけという組み合わせにはロマンを感じざるを得ない。しかしだ、それは着る人次第で天国にも地獄にも変わる代物なのだが、残念ながら今は後者の方だ。地獄絵図が展開されている。

「…よー借金取りー今日も相変わらず大きい乳だな」

「誰が借金取りだ！／／／」

「胸が大きい事は認めるということか」

「うるさい！／／／それよりもさっさと服を着ろ！／／／」

女性、シグナムは冴えない男、ガジルに背を向けて言う。

ガジルはやれやれと首を振り、探偵所の中へと入っていく。

そこでやっとシグナムは此処へきた目的を思い出したのか急いでガジルの後を追う。

事務所の扉を開けると、冴えないだらしの無い男が一人で住んでいるとは思えないほどに整理された玄関が広がる。

「入るぞガジル」

「上半身裸ですがどーぞ」

シグナムは一瞬と惑うも、事務所の中へ入る。

入ってすぐの客間は広く、来客用のソファアークが二つ、テレビ、大量に積まれた大人向けの雑誌等が置かれている。

玄関同様綺麗に整頓されている。

シグナムは許可も取らずにソファアークに腰かける。

そこに服を着き、大人な雑誌を片手に向かい合うようにガジルが座る。

「んでー、用件は？」

「いつもの事だ。さっさと管理局に入れ」

そう、シグナムが此処へ訪れたのはガジルを管理局へと入局させるため。

もうこれで何度目になるか、返ってくる答えは全て同じ。

「断ーる」

「そうか…少し疲れた、珈琲を貰うぞ」

「待て。買ってきたばかりの珈琲がある。そいつを飲め」

「なんだ、今日は機嫌でも良いのか？」

「お客様には優しくしないとな」

シグナムはこれまで二桁ではすまないほど此処へ来ている。
そのことから何時からか彼とは友人という関係になってしまった。

「ところでなんだがシグナム」

「なんだ？」

「管理局はどーして俺みたいな奴を入れたがってんのかね？」

「尤もな質問だ。」

こんな朝っぱらから大人な雑誌を読みふけてる見た目からしてだらしの無い男の何処に需要があるというのか。

「古き象徴である探偵を消したいのかもしれないな」

「なるほど。んなーことしなくても勝手に消えるだろうがね」

「むっ、探偵を辞めるのか？」

「今は止める気はねーよ。まっ、結果は時代の流れが運んでくるさ。
それともう一つ良いか？」

「なんだ？」

二人分の珈琲を持ちながらガジルはシグナムに質問する。

「”萌え”というモノについてだ」

「…”萌え”？」

「ああ、最近ハマッタアニメについての掲示板に足を運んでな。そこに

〇〇たん萌ええ〜、やら、〇〇たんはああ、等という言葉を目にしてな

その”萌え”というモノがどオーしても分からんのだが、意味を知らんか？」

シグナムは顎に手を沿え、考えてみるが答えが出なかったのか首を横に振る。

「そうか…自分で調べておくかな」

「待て。結果が出たなら教えて欲しい、このままでは私の負けという形で終わってしまう」

どー考えれば負けになるのかはこの際放っておく。

珈琲を飲み干したシグナムが席を立とうとしたとき、呼び鈴が鳴った。

ガジルはシグナムを手で制し、立ち上がり玄関へと向かう。

「…新聞ならお断りッッ！？」

玄関を開けたガジルの目に飛んできたのは絶世の美女。

普段此処に足を運んでくるのはシグナムか飲み仲間のおっさんか新聞配達のおっさん。

だが何用で此処へ来たのが問題ではない。

此処に見知らぬ美女が来たのがガジルにとっては重要極まりないことだ。

一瞬で冴えた目、瞬時に服装をただし片手に持った大人向けな雑誌を事務所の中へと放り込む。

「どうしましたか？」

もしかしたらアレなのかもしれない。

ガジルのことが好きだけど恥ずかしくていつも声をかけられず物陰から見守ってくれている可愛い子ちゃんかも知れない。

という有りもしない可能性を絶対の事実と確信しているガジルの声には貼りがある。

「実は…その…／／／」

美女の顔が紅潮して行く。

…ガジルが異様に興奮しているが可哀想な結果にしか転ばなさそうな雰囲気。

「なんですか、緊張しないで、気持ちの整理をしてから来てください。

俺は…待ってますよ、この身が朽ちてなくなろうと、未来永劫…貴女を待ち続けますよ」

「なんだ…いつもに増して気持ちが悪いな」

「台無しじゃねーかッ！」

どこか不機嫌なシグナムの出現によりガジルの幻想は某右手にぶち壊された。

まさか女がいるなんて…私とは遊びだったんですね！？酷い！！
という展開がガジルの頭の中で構築された途端ガジルはいつものだ

らけた表情に戻り、事務所に投げた大人向けの雑誌を取りに戻った。

「それで何か用ですか？」

いつの間にかシグナムが接客をしているがガジルは気にせず雑誌を読みながら珈琲を酌む。

酌み終わると珈琲を美女の前に置き、ソファアの腰かける。

「実は…相談したいことがありまして」

その言葉を聞いた途端にガジルの目つきが一瞬鋭くなる。

誰もそのことに気づかないまま話は進む。

「なんですか？良ければ管理局の方でお話を聞きますが」

業務妨害をされているはずが、ガジルはシグナムを止める事無く美女の目を見続ける。

その瞳は普段の彼からは想像もつかないような目。

「あの…管理局の方ですか？」

「はい」

「あの…この事は…その…」

「シグナム」

美女が言葉に詰まった途端、ガジルがシグナムを呼び止めた。

「どーやら、この人は俺に仕事を頼んでいるらしいぜ」

ガジルの言葉を聞き、美女は首を縦に振る。

「で、何の用だ？美人にはサービスするぜ。ただの犬探しじゃなさそーだしな」

「はい…実は陰湿なストーカーに追われていて…」

「…なにか分かる事は？」

「男性、それから身長は150ほどで、いつも仕事終わり、夜の九時ごろから…ずっと見られ続けられてる気がして…怖くて夜も眠れなくて…」

「ならコレに住所と、それから仕事場を教えてくれ」

それに待ったを入れたのがシグナム。

「ストーカー解決なら管理局の方でも行っている」

「シグナム…ただのストーカーならこの人もとくに管理局に言ってるだろうよ。」

このストーカーは大分長いこと行われている。化粧で隠しているが隈も酷い。

それに清潔な感じと手の切り傷、飲食店で働いているな…多分、レストラン。

見たところ最近出来た傷が多い。さては、犯人が大きく動いたな？」

「は、はい。確かにレストランで働いていて、最近ストーカーが私に直接電話で声をかけて来るようになって…それから」

「接触もした、か。じゃねーと容姿が分からんからな」

美女は呆気にとられた表情で頷き、仕事場と住所を書いた紙をガジルに渡す。

「OK、任されたぜ。今日の夜にアンタの住所近くで張る。なにかあったらすぐに電話してくれ、これ電話番号。んじゃーな」

美女はお願いしますと頭を下げ、事務所を後にした。

「さてと、腑に落ちないかねシーグナム」

「…まあな」

それもそうだ。

こんなチツポケな事務所に頼むよか、技術の進歩した管理局に頼るのが普通だ。

「…依頼主は多分人見知りだろう。やけに丁寧、言葉も所々詰まっていた」

ガジルは綺麗に飲み干されたコップを台所へと運ぶ。

「精神的な問題だろうよ。これ以上見られたくない。それで頭が一杯なのさ。」

もし管理局に頼ったなら依頼主も監視されそうだからな。だから基本一人な俺を頼った。そんなところだろう」

「だ、だからと言って探偵に頼らずとも」

「だから精神的な問題って言ってんでしょーが。管理局に頼むのは金も時間もかかる。」

その反面俺は時間もかからず行動出来、美女にはサービスがモットーでね」

シグナムは言い返す言葉が見つからないのか、うつと唸る。

「…で、どうするんだ？」

「ん？とりあえず朝飯食ってブラブラして、昼飯は外食だな」

「…外食？珍しいな？」

「依頼主のレストランさ」

「なら私も」

「来ても良いけど私服で来い。管理局の制服は目立つからなア」

そんじゃ、とガジルは席を立ったシグナムに手を振り、三人分のコップを洗い始めた。

依頼No.1 某青狸レストラン（前書き）

探偵もののハードルの高さに泣けてきました…
それにギャグも何もあつたもんじゃねーです

そんなこんなで今回はグダグダと、そして次回で依頼NO.1を解
決して感じてやっていこうと思います

今のところ納得いかない部分も多いと思いますが、次回で納得のい
くような説明ができればなーなんて思っています

それではどうぞ！

依頼 No. 1 某青狸レストラン

某青狸がCMを務めていそうなレストラン。

そのレストランに二人の男女が腰掛けていた。

一人は黙々と片手に持った大人向けの雑誌を読み続けている男、探偵ガジル・アルタレッタ。

向かいに座っている、ママーあの人変な本読んでー！しっ見ちゃだめッ、の会話を聞き顔を赤くさせているシグナム。

「…私服で来て良かった」

「だろ？ただでさえ目立つんだから」

「誰のせいだ誰の」

静かに拳手したガジルの目に手元にあるコップの中の氷を押しつけた後、シグナムは店内を見渡す。

そう、二人が此処へきた理由はただバカをやるためでは無い。

このレストランには今朝ストーカーを捕まえて欲しいと依頼してきた女性が働いている。

恐らく、犯人が姿を見せるのではないか、そう思った考えで来たのかはガジル本人でなければ分からないところだが、私服で来いと言ったからにはそれしか考えられないだろう。

…目立ちまくっているが

シグナムは咳払いを一つして、犯人に悟られないように犯人らしき者を探す。

身長150代の男……見たところ店内にはいない…

「…お前も少しは探したらどうだ」

シグナムは未だ雑誌に食いついているガジルに言う。

言いだしっぺはガジルだ。いつまでもレストランで読んではいけない雑誌を破り捨てて自分も仕事をしたらどうだ。そんな気持ちで一杯だ。

「探すって…なにを？いい男なら目の前にいるだろう」

「……は？」

「いやだから、いい男」

「…いやいや、此处に来た目的は」

「久しぶりにレストランって単語を見たらレストランに来たくなっちゃった。なんか勘違いしてるみてーだけどよ、この俺が働くのも？」

正論。例えばガジルは一言も”レストランで犯人を捜す”などと言っていない。

「まあ、お前も日々仕事熱心でさぞストレスも溜まっているだろうからなと私服で呼んだ。まっ、デートってことで」

人生初のデートがこんな男と…なんと災難なおっぱい魔人さん。その満更でもない顔でなければ深く同情していただろうが…。

「おっ、来た来た」

ウエイトレスが料理を運んできたので雑誌を読むのを止め、自分の前に置かれた料理へと視線を注ぐ。

ガジルが注文した品は、ライス（超絶特盛）、味噌汁、焼き魚、サラダといういたって健康的なメニュー、その反面シグナムの注文した品は、ライス、ハンバーグ、スパゲッティ、ミートボール、オレンジジュース、一体何処へ向かうとしているのか。

「…お前、健康って言葉知ってる？」

「いただきます」

シグナムは合掌をし、ハンバーグと共に運ばれてきた人参をガジルのライス（超絶特盛）の上へ全て放り込む。

単なる嫌がらせなのか、はたまた人参が嫌いなのか、後者の方であると非常に微笑ましいが前者の方であればプツリと来てしまいそうな勢いで人参の他ピーマン等をライス（超絶特盛）から味噌汁に変える。

「…あの、シグナム」

「な、なんだ？」

「…何故こんな嫌がらせを？なんか悪いことしたか？心当たりがありすぎて困るんだが…」

「い、嫌がらせ？違う！日々グータラ過ごしているお前はきつと野菜を取っていなさそうだからな、わ、私なりの気遣いだ！」

「…主に野菜がメインなんだが」

「うるさい！太るぞ！」

「…体脂肪率は1も無いぞ」

「うつ…いいから食べる…」

少し膨れた表情でハンバーグを口にするシグナム。

ガジルは自分の料理にばら撒かれた野菜たちを見て気づいた。
よく見ると野菜が文字を作っている。

『入局』と見えないことも無い。まさかこれを狙ったのではないだろうか？

先ほどから表情の変化が激しい。食事をしている今でもビジネスモードに入っているとでも言うのか？

「今は仕事なんてほっとけよ」

「ん？何か言ったか？」

「なんでもござらんよー」

ガジルは呆れた表情でライスを口にする。

次に魚、塩味が香ばしい。

次に味噌汁。多少余計なものが入っているがこれまた美味。

美味なはずだが、ガジルの眉が一瞬寄せられる。

視線は味噌汁から厨房へ、この角度なら厨房の置くまでは見えないが入り口付近ならよく見える。

「…ガジル？どうした？」

ガジルの異変に気づいたのかシグナムがガジルに語りかける。
もしかしたら嫌いだからガジルに食べてもらおうと味噌汁の中に放り込んだ野菜が何らかの変化を起こしてガジルの体に悪影響を与えてしまったのではないか？

ここへ来てやつと罪悪感に襲われたシグナムは骨まで食われた魚があつた場所にミートボールを一つ置く。

「ん？いやー…ちょっとなー……ん？どうしたんだコレ？」

ガジルは自分の皿に置かれたミートボールを眺める。

ミートボール…ガジルの脳内に食事中にハシタナイ！モノが浮かぶも、シグナムに限ってそれは無い、と違うものを連想する。
丸い……”？

さっきの入局の文字とあわせると
入局。

…なんだこれはステに入局済みという意味か？

「…肉も食べる」

「…サーイエッサー」

シグナムと食事を進めていく中、ガジルはまた味噌汁を口にした後、厨房の中を覗きこむ。

「ふむ……ごちそうさん」

ガジルは空になった皿を綺麗に整え、雑誌の方に集中する。
食事が終わったのかシグナムがガジルに話しかけてきた。

「ガジル、これからどうするんだ？」

「ん？そうだな、食後の散歩でもいくか」

「そんじゃよろしく頼むぜおっさん共！」

「チクショー！テメエは美人ちゃんとデートか！？隅に置けねエー
なアー坊主！」

食後の散歩にはひっそり最悪な公園の奥にあるビニールシートで作られたテント。

ガジルはその住人と笑い話を済ませ、テントの奥にいるシグナムのもとへ戻る。

「おう悪い悪い。時間かけたな」

ガジルは不機嫌全開なシグナムに謝罪をし、公園を歩き出す。

「全く…いつもこんな所にいるのか？」

「暇な時によ」

怒りより呆れの方が大きいだろう。

普段は仕事がなくダラダラし、暇となればホームレスと談笑。
ここまで来るとその残念を褒めてやりたいほどに残念だ。

「はあ……それで、次は何処へ行くんだ？」

「シグナムどっか行きてー所あつか？」

「……こういう時はお前がエスコートするものだぞ」

「……残念な俺がデートしたことあるとでも？」

「……すまない。……あー……行きたいところがあるんだが」

「何だね？」

「ふむ……これも中々……」

「……………」

あの後ガジルたちが足を運んだのは一軒の店。

ピンクオーラ充滿の喫茶店なら可愛げがあるが、ガジルは店内を見渡す。

目に飛び込んでくるのは鉄鉄鉄。

匂いは油と鉄の臭い。

シグナムが一度行ってみたかった所とは、武器型デバイス部品売買

所。

腕に自身があるデバイスマスターたちがそれぞれ店を出し、商品を買ったり売ったりする所だ。

「最近出来たらしいんだ。一度訪れたいと思っていたが、まさかコレほどまでとはな」

シグナムは鼻息を荒くしながら店を見て回る。

彼女の戦闘への興味は人並みはずれている。

数ヶ月前の知り合いからの電話でそのことを知ったガジルだが、まさかこれほどまでとは。

「流石バトルマニア…局じゃ模擬戦ばかりって噂は本当だったか…
…本当に仕事してんのか？」

「ッ……し、しているぞ」

「…なんか、目立たない簡単な仕事して後は戦闘につき込んでいそうだな……」

「バカを言っな！しっかりと仕事をこなしているだろう！」

「…ほぼ毎日俺んとこ来て暇潰すのが仕事か…管理局は随分とお暇なようだ」

「黙れ残念！毎日がグータラの貴様に言われる筋合いは無い！」

「るせえニート侍！こちとら見えない所で仕事してんだよ！」

「誰がニート侍だ残念！貴様もこの光沢が放つ真の輝きを知らんの

だろう！」

「んだと！ちょっとテメエのデバイスみせて見る！」

望むところだとシグナムは自身のデバイス、レヴァンティンを武器形態にしガジルに手渡す。

受け取ったガジルは、ほうと声を漏らし、レヴァンティンを隅々まで見る。

「どうだ！」

「…良い手入れだが、残念だったな」

「お前にだけは言われたくない」

「うるせ！…たく、いいかシグナム、お前はこれで満足かもしれないが、俺は満足できない。確かにこの刀身は素晴らしい、しーかしだ、鞘はどうだ？」

ガジルはシグナムの手に握られている鞘に目を落とす。
鞘は美しい刀身からは想像もつかないほどボロボロで、汚れも目立っていた。

「ッ…これは」

「お前は次に『カレーを零したんだ！』という」

「カレーを零したんだ！…ハッ！」

「フッ、どんなに美しい刀身だろうが、それを収める鞘がそれでは

なア」

「うつ…」

「ま、俺は大ー人だしー弱いものイジメは出来ないんで俺の負けってことでいいよ。うんいいよ。綺麗綺麗美し過ぎて目がドツカンしちまいそーだなー」

ガジルは半端ではないほどイラつかせる笑みをシグナムに向け、近くの店の商品を見始める。

己がデバイスの美しさ（？）を認めてもらえなかったシグナムはレヴァンティンをギュッと抱き寄せ下を向く。

ガジルは流石にやり過ぎたかと思ったのか、店主に何品か注文し、シグナムのもとへ行く。

「ま、まア鞘はボロボロだけどこれを使えばチヨチヨイのチヨーイだから！元気だせよ」

「……なんだ急に…さっきまであんなに……」

「え、ええーと…そうだ！ツンデレだ！」

「……………本当に残念な奴だな」

「じゃかしい！」

やけに上機嫌なシグナムと別れを告げた後、ガジルは一人探偵事務所の窓から道行く人の顔をボンヤリと眺める。

普段は何もないただの通路だが、夕焼けの時間には陰で道に絵が出来、残った部分は茜色に染まる。

これが気に入っているのかガジルは鼻歌混じりに天井を見上げる。片手に持っているのはいつもの大人な雑誌ではなく、一枚のメモ。メモには依頼主がストーカーの被害にあった時期とレストランで働き始めた時期が記されていた。

「…後は管理局がどー動くかだよなア…」

何しろ”犯人”には切り札がある。

管理局が”犯人”を捕まえたところで”犯人”は切り札を使って事なきを得るだろう。

「ふあゝ…久しぶりに体動かすことになりそうだな」

メモを折りたたんでゴミ箱に投げ入れ、ガジルは大人向けの雑誌を片手に事務所を出た。

依頼 No. 1 解決と新たな依頼（前書き）

依頼 No. 1 解決！

改めて事件を振り返ってみましたがシヨボー！
こんな調子で大丈夫か？大丈夫じゃない問題だ。
ちよつと刑事ドラマ借りてきます

依頼 No. 1 解決と新たな依頼

午後九時。

地を照らしていた太陽はとつくに寝静まり、暗闇が支配する時間帯。そんな夜道を一人の女性がやや早歩きで進む。

その女性は今日アルタレッタを尋ねた依頼者。

急ぎ足なのは気のせいではない。

この夜道に、もう一つの気配がある。

女性はこの気配に気づいている。

これまで何度も管理局に相談したが、解決されずに今では全く話を聞いてくれない。

解決する術が彼女には無い。確実に恐怖が迫っているというのに誰も味方をしてくれない……してくれたのはある人だけ。

依頼主は頭に浮かんだ男性の顔を振り切り、歩く速度を上げる。

すると、後ろから迫っているはずの気配がふと消えた。

何があつたのかと振り返ると、依頼主の視界にコートを着た180を越える身長の方が立っていた。

暗くてよく確認できないが、今日依頼を聞いてくれた探偵さんだろ
うと判断し、笑顔で会釈して家へと足を進めた。

依頼主が急ぎ足で家へと帰宅したのを見届けたコートの男は、被っていた帽子を取り、依頼主がコートと誤っていたビニールシートを脱いだ。

「あー、良い仕事したわい。これやるだけで金くれるなんて、良い

キャラしてやがるぜ坊主」

男：ガジルが昼頃あつたホームレスのおっさんは手に持った酒瓶に口をつけ空を仰いだ。

遠くにサイレンの音が聞こえる。

「管理局さんも大変だなー、そんじゃワシは帰るとしますか」

「くそッ！どーなっているんだ！」

暗い部屋、一人の男が誰もいない部屋で一人叫び声を上げる。

確実に近所迷惑で訴えられるほどの声の大きさ、だが誰も注意する者もない。

「なんなんだ！聞いていないぞ！また彼女が管理局に頼んだなんて！」僕は何も聞いていないぞ”！お陰で写真を撮ることも出来なかったし触る事も出来なかった！！」

「だろーなー、俺が言うなって言っただから」

誰もいないはずの部屋……店内に男の声が響く。

瞬間、まるで狙ったかのように店内の電球が一つ光、声の主をガジルを映しだす。

「ヘイ、このクリームマンゴー天井超絶特盛五人前よろしく。…店長」

男の顔が、今日ガジルたちが昼を過ごしたレストランの店長の顔が驚愕に歪む。

しかし店長は汗を流しながらもすぐにいつもの営業スマイルへと顔の形を変え、ガジルに言う。

「お、お客様、当店は夜の営業を禁止としていますので、お引取りを」

「いやいや、後五分もしたら出るよ店長。いやー…犯人さんの方が正しいかな」

ガジルは行儀悪くテーブルに腰をかける。

「ス、ストーカー？なんの事を言ってるんですか？」

「水でも飲んで落ち着けよ。誰もストーカーなんて言っていないだろうが」

ガジルは片手に持った大人向けの雑誌に目を移す。

新刊なんだろうかガジルのリアクションが何時もよりも新鮮だ。

「…彼女は何度も管理局にこの事を頼んでいたらしいな。まあ以前は相手にされていたが、今じゃ全く相手にされていない。んで俺思ったんだがよ、ミッドーの技術力を持つ管理局がたかがストーカー如きに遅れを取るかね」

「さ、さあ……」

「惚けんなって。依頼主は気が小さいほうでな。こんな事が続けば誰かに愚痴りもしたくはなるさ。で、その相手がアンタだって訳だ店長。安心して話せる相手ってことであんな美人に目を付けられるとは羨ましい限りだが、アンタはそれを逆手に取った。上手く話を進めて彼女が”管理局”に訴えたかどうかを知った。後はアンタの思うが侭だ。彼女の勤務時間と住所電話番号等を知っているアンタならストーキングなんぞ余裕だったろうな。…今日飲んだ味噌汁、変な味がした」

「……………」

「俺の連れが入れた野菜で初めは良くわかんなかったが、ほんの少し、ほんの少しだが鉄の味がした。きっと彼女また手を切ったんだろう。オカシイよな、彼女の唯一安心できる存在のアンタが見守ってやってるのに、恐怖を感じるなんて。どーせヤラシイ目で彼女事見てたんだろ変態野郎」

雑誌を読み終わったのかガジルは雑誌をテーブルに置き、テーブルに備え付けてあった手拭で鼻血を拭き取る。

「まあ管理局に見つかった所で、アンタは”店長”つつー肩書きを使つて事なきを得るだろうがよ。あ、今の会話しっかり録音してあつから変な言い訳出来んぞ」

ガジルは自分の手の中に納まっている音楽プレーヤーを店長に見せ、再生してやる。

店長。これが犯人の最大の切り札。

店長という肩書きを使えば彼女に忘れ物を届けに来たとも言え

事なきを得る。

店長は顔を俯かせ、肩を震わす。

「確かに…それが僕の”切り札”だ……だけど、まだ”隠し玉”が残っている」

「違法デバイス、だろ」

またも店長の顔が驚愕に歪む。

店長の後ろに回した手が持っていたのは剣型のデバイス。

「最初、彼女が管理局に連絡を入れたときアンタがどー管理局を振り切ったのか。彼女がアンタに報告した？ いや違うね。最初は誰も気のせいだと思う。しかもこのご時世。局員なんざ腐るほどいる。軽い頼みだろうが気のせいだろうが引き受けてくれる管理局がよ。んで、何処から知らんがどっかで手に入れた局員のみに配られるはずのデバイスを民間人が持つという違法のデバイスで証拠になるものを全部パーにした」

「…知られたからには仕方ありません。お客様、ご注文を確認します。”死”以上でよろしいでしょうか！」

店長は気が狂ったかのように剣を振り回しガジルへと迫る。
そんな店長を見たガジルはガッカリしたように肩を落とす、腕を組む。

「デバイスは優秀だが、使用者がド素人だとなあ…あーあ、準備体操してた俺がバカだったぜ」

ガジルの頭を狙った店長の横薙ぎの一閃。

ガジルはそれを体を仰け反らせギリギリのところまで避け、両足で店長の体を蟹挟みにした後、ガラ空きになつた顔面へと頭突きを浴びせる。

仰け反った店長を足で突き飛ばした後、ガジルは静かに立ち上がる。

「まあ戦闘は雑魚以下だが、ストーキングは一流だった。だが惜しいなー、俺に頼んだ彼女のセンスが抜群ってことだろうなアンタの敗因は。…まあーなんだ、言ってやるとしたら」

ガジルはカウンターに置いてある容器の中の水をコップに注ぎ、冷たい水を飲み干す。

「残念だつたな」

「デメエが言うなアア」「うるせエエエエエエエエエエ！」

ガジルの逆鱗に触れた店長はサッカーボールにでもなつたかのようにガジルに顔面を思いつきり痛快に殺さない程度に蹴られる。

店長の体が宙を舞い、近くの四人用の席に泡を吹きながら綺麗に着地した。

「ありがとうございました」

翌日、探偵事務所のソファで依頼人が深く頭を下げていた。もちろん謝罪などではなく、感謝の念を籠めて。

「どーいたしました。次からは気をつけるんだぜ。後、またなんか厄介事があつたら俺にいいな。話は聞くぜ」

「はい！本当にお世話になりました！」

依頼主を見送ったガジルは事務所の中へ戻り、不機嫌そうにソファに腰かけるシグナムに言う。

「ホームレスのおっさんを一晩泊めてあげてありがとうございました。管理局さんよ」

そう、昨日依頼主の家の付近にいたガジルに協力したホームレスのおっさんを勘違いで逮捕。

管理局は容疑者にも優しくベットまで使わせてくれた。

これがガジルとホームレスの契約。

ガジルが金と一晩寝床を上げるから協力しろ。

「…まんまとお前の掌で踊っていたというわけか管理局も」

「依頼者も犯人もな。依頼者には俺を見ても絶対に挨拶するなんて言っただけだな。昨日の夜追われていた彼女はそのことを忘れちゃったんだろ。ま、それで寝床を確保できた訳だが。改めてありがとうよ管理局殿」

「うるさい！貴様も犯人から残念な奴だと思われていたくせに！」

「ッ！…んだとおっぱい魔人！揉むぞゴラァあー！」

「逮捕だ逮捕！とうとう頭まで残念になったか残念男！」

「その残念男の掌で小躍りしてた奴は何なのかねー！あー！ニート侍か！」

「黙れ残念不純下品鈍感男！」

「そこまで言うか泣いちまうだろうが！」

「あつ……すまん」

「……こつちも言い過ぎた」

突然現れたとても居心地の悪い静寂。
その静寂を切り裂いたのは此処へ来た本来の目的を思い出したシグナムだった。

「忘れるところだった。ガジル、管理局「入らん」……違う」

いつもと違う質問にガジルはシグナムを見つめる。

「管理局と協力して欲しい……」

「……なんで？」

「今回の事件で犯人が使用していた違法デバイスについてだ」

「……何か分かったのか？」

「ああ、今捜査をしているが中々尻尾を出さん。そこでお前に」

シグナムはどうせ断られるだろうと俯いていたが、いつもの即答が返ってこない。

見るとガジルは眉を少し寄せ何かを考えているようだった。

「断る。…と、言いたいところだが。俺の仕事はこの町の揉め事を一軒でも解決する事。」

今回の事件も違法デバイスが成功させた事件にも等しい。だったら俺の答えは一つ」

「本当か！感謝する！」

「俺に依頼しろ」

「……本当に残念な奴だな。ここで素直に協力してやると言えばお前の株が上がっていただろうに」

「うつせ！大体なんで俺が管理局にボランティアアしなきゃなんねーんだよ！」

「揉め事を解決するためだろう！？」

「うるせ！管理局は別じゃー！管理局にボランティアするぐらいだったら自分で捜査してる！」

ガジルは叫び散らした後雑誌に目を戻す。

叫び散らした後だが体は素直なようで気づいたら鼻血が出ている。

「じゃあ依頼する！」

「…報酬は？お前金あんなーだろ？」

ガジルは鼻血を拭き取りながら言う。

「か、金ならある」

「嘘付け、家事全般がダメなお前が管理局の制服をそこまで綺麗にアイロン掛け出来る筈ねーだろ。俺が見るからにどっかの誰かんとこに居候していると見たね」

「うつ…じゃ、じゃあ……わ、私でどうだ！／＼／（世話的な意味で）」

「ヴェエエエエエエエエエエエ！？（【ズドン！】な意味で）」

珍しくアタフタとしているガジルにシグナムは攻め寄る。

「どうだと言っている…！」

「い、いやーでも付き合ってもいないんだぜ俺たち。お、俺もお前は欲しいけど…いやいやそうじゃなくて！そこまで残念じゃないから！もちろんお前が嫌と言う訳では」

「頼むガジル！私にはお前が必要なんだ！」

勘違い。圧倒的勘違い。

シグナムの言い方もそうだが、ガジルの反応は残念すぎる。普段の余裕は何処へ行った？実家に帰った？やかましい。

「ふ、不束者ですが…ど、どーぞよろしく願いします」

「? …… 契約完了という意味か? 良かった… よろしく頼む」

一体この二人は何処へ向かおうとしているのか

そしてガジルの元にやってきた新たな依頼は何処へ向かおうとしているのか

依頼NO.1 解決

依頼No.1 解決と新たな依頼（後書き）

ホームレス

「あれ？なんでワシ捕まったの？」

シグナム

「取り調べは明日行いますので今日は此处でお眠りください」

ホームレス

「…5年と3ヶ月ぶりのベッド…ほんと、捻くれモノじゃが良いキ
ヤラしてるぜ坊主」

依頼 No. 2 Sッ気むんむん娘（前書き）

依頼 No. 2 ということですけども、この話はまた後半に出そうな予感が…

タイトルに関してはノーコメントでお願いします
決して私がMという訳では……それではどうぞ

依頼 No. 2 Sッ気むんむん娘

管理局 都市クラナガンの中心部にある本部を中心に全世界に建ち並ぶ組織。

四人の少年少女はその都市クラナガンに新しく建設された部署、機動六課の廊下を歩いていた。

「ねえねえティア、今日つて確か…」

肩まで伸びた青色の髪を持った少女 スバル・ナカジマは隣を歩く同僚のオレンジ色のツインテールをした少女 ティアナ・ランスターに語りかける。

「ええ、例の人物が来るらしいわね」

「例の人物？」

ティアナの答えにスバルの隣を歩く赤髪の少年、エリオ・モンディアルが問う。

「誰ですか？」

「なんでもシグナム副隊長が六課建設前から入局を頼んでいる人が、此処機動六課に顔を出すらしいって話」

「キュルクー」

エリオの問いに答えたのはエリオの隣を歩くピンク色の髪を持つ少女、キャロが答える。

そのキャラの頭の上に乗っているのは龍フリード。

「へー、シグナム副隊長が…一体どんな人なんだろうね？」

「”探偵”よ」

「え？」探偵”？まだやってる人がいたんだ…」

そこまで希少価値の高い探偵。

一体あの残念はどのようにして生活をしているのだろうか？

「一昔前は探偵が治安を治めてた感じだよね？」

「私達が生まれる前らしいですけど…」

キャラが興味深そうに言う。

キャラの年齢は10、ちなみに隣を歩くエリオと同年代。

別世界への移動を可能にした技術が生まれたのは20年前。

「そうよね…実際、探偵なんて見たこと無いもの」

「その分楽しみだけだねー」

…何事も過度な期待をするものではない。

例えば注目のエロゲを寝れないほど楽しみにして発売当日購入後、すぐさま機動してみて一通りプレイして「うん…まあ、ゲームだから、うん」

みたいな反応になるより、あまり過度な期待をせずに発売当日購入後、すぐさま機動してみて一通りプレイして「やべっ！眠れない夜が続く！」

のような反応をした方がいい筈だ…多分。

「あつ、そういえば今日ティアのお兄さんも来るんだっけ？」

「あ、うん。…だからちよつと化粧を…／＼／」

顔を紅潮させるティアナ。

確かに16には似つかない色っぽさが出ている。

何故実の兄に色仕掛けをするのかは人権に関わる問題なのでこの際放っておく。

廊下を抜けた四人の目に飛び込んで来たのはホールに整列した同僚の皆様。

自分たちが遅れていると気づいた四人は一目散に指定の位置に並ぶ

「皆さん、おはようございまーす！」

『おつはアアアアア！！』

機動六課最高責任者、部隊長八神はやては並んだ隊員達に挨拶をする返ってきた無駄に活気のある声に頷きながら今日集まってもらった理由を話す

「今日皆さんに集まってもらったのは他でもありません
六課建設前からシグナム副隊長が協力を頼んでいる人物が今日、ここ機動六課に来ることになりました！」

『おおオー！』

弾けるはやての満面の笑顔。

返ってくる新鮮かつ太い声、ホールはもはや小さなアイドルのライブ会場のような空気が充満している

「それじゃみんな行くで？」

『HEY！HEY！イラッシャイツ！HEY！HEY！オキヤクサマッ！』

何処で練習したお前等？

そんなツツコミが飛びそうなほどに見事なかけ声、逆にこれでは入りにくい。

ホールという会場はスデに盛り上がっている。

その空気に完璧についていけない客人。

ホールシーン…のような事に成りかねない。

無駄に洗練された挨拶に応え、ホールへと続く扉が開く。

現れたのは大人向けの雑誌を片手に持った無駄にガタイの良い残念ことガジル・アルタレッタ。

緊張の色を全く見せずに場が冷めることも全く気にせずに威風堂々歩くところはいつもどうりだ。

服装はタンクトップとハーフパンツという軽い格好。

ガジルはそのままトコトコと雑誌に目を通しながらはやての横に立つ。

「なあ部隊長、こんなもの思う？」

「セクハラですか？そんな事より…エロ本片手に登場したガジル・アルタレッタさんの紹介やで！それでは、ガジルさんよろしゅうな！」

はやてはキラッ　　つと星が飛ぶような回転をし、マイクをガジルに渡す。

一同の期待の籠った視線がガジルに降り注ぐ。

「探偵。協力って形だが連絡入れるか入れないかだと思っんで俺の事は忘れても構わん。

以上質問は？」

『ハイッ！』

「なんだ隊員A？」

『その手に収まってるのはもしかして『Sッ気むんむん娘』の最新刊でありますか！』

「正解だ。ちなみにこれは先週ア○ゾンで購入した限定版だ。

定価は1280円。付録はなんと限定版のみにDVDがついている。しかしこれに気づくとは、隊員A、いい趣味を持っているな？今度酒でもどうだ？」

『へへへ、ガジル氏も中々のご趣味をお持ちのようで』

「質問は以上か？」

「ねえ…ティア」

ガジルの紹介を聞き終えたスバルは隣に立っているティアナにそつと耳打ちする。

「…淒く残念な人だね」

「…そうn「そこッ！残念って言うな！」…そうね」

まるで高校デビューに失敗したかのような雰囲気ホールを包む。
残念この上無い紹介をされた隊員達のテンションは見る影も無く低下していく。

「そんじゃ」

ガジルはマイクの電源を切り、そのままマイクをはやてに渡しこの場を去ろうと足を進める。

はやては苦笑いしながらマイクを受け取り今日の任務を隊員達に伝えようとマイクを握ったとき気づいた。

マイクの電源が切られていることに。

オカシイ。マイクの電源自体を切る事はオカシイことではないのだが、”管理局専用マイクの電源の切り方を知っている”ことがオカシイ。

このマイクは魔力と呼ばれるエネルギーで動く代物。

通常このマイクの電源はその魔力を切る事で落ちる。

先ほどはやてがガジルにマイクを渡した際も、予めマイクに魔力を入れてガジルに渡した。

この魔力自体は限られた人が持つものではなく、必ずと言って良いほどの確率で人が持つもの。

だがこの魔力をコントロール出来るようになるには管理局で学ぶ必要がある。

「どーなつとるんや…」

余計な疑問を振り切り、マイクに再び電源を入れようとしたとき、

また気づいた。

”マイクの電源が手動で切られてあることに”

魔力でマイクの電源を切るのは容易いものだが、手動となれば困難だ。

外見的にはいたってシンプルなマイク。

しかし中身は複雑で、手動で電源を切るのにはやはり管理局で学ぶ必要がある。

「……皆さん！今日の任務はなー！」

はやては腑に落ちないまま任務を伝え始めた。

「ガジル」

鼻の下を伸ばしながら廊下を歩いていたガジルは、凜とした声で呼び止められた。

声の主はシグナム。何事かとガジルは振り向くと、目に映ったのは機嫌が悪そうなシグナムの顔。

「なんだ？」

「なんだあの挨拶は？」

「普通の挨拶だろうが」

「残念な挨拶だ。まったく…主はやての顔に泥を塗るような真似だけはしてくれるなよ」

「主？あの子騎士だったのか？」

騎士。管理局に属する白兵戦を得意とする聖王騎士団の一員。ちなみにシグナムも聖王騎士団の一員だが、彼女の場合特別にはやて直属の騎士、ということになっている。

「あの若さで主か…良い逸材だなー」

「ああ、可憐さもそうだが家事全般をこなす器の大きな自慢の主だ」

「なるほど、お前は主様の家にお世話になっているということか」

「うつ…それは騎士として主を守るために「シグナムさん」……お前は」

シグナムは声のした方向に振り向き、声の主を確かめる。

声の主は管理局の制服に身を包んだオレンジ色の青年、ティード・ランスター。

「どうしたティード？どうして六課に？」

「いえ、探偵の方が此処に来られると妹から聞いて」

「ああ、それならそこに……ん？」

無い。先ほどまですぐ隣に立っていたはずのガジルの姿が無い。

何処へ行つたのかと周囲を見渡すも人影は見つからない。

「?おいガズ『ガタゴトツ』…!」

物音が聞こえた天井を見上げると、通気口が開いてあつた。

「…また面倒な事を。ティーダ、お前はホールに向かえ。今主はやてが説明をしているところだ」

「はい……」

「どうした?何かあつたか?」

「いえ…昔の先輩が…あ、すいません。それでは失礼します」

ティーダはシグナムに一礼してホールへと向かった。

「は…だから嫌なんだよ、管理局に来るのは」

ガジルは大きな溜め息を吐き、先ほど頂いた違法デバイスに関する資料に目を通す。

今ガジルがいるのは六課の屋上。晴天でそのまま寝たい気分だが、それを我慢しながら資料に目を通す。

「ふむふむ、これまでで15件。最近になって10件か…一気に増えたな」

何度か調査に当たっているな…成果は無し、か…

あの店長も違法デバイスを貰ったときに記憶弄られてたらしいからな…現段階では調査は…」

何処からか出したペンで資料に書き込みを入れ、視界に広がるクラナガン眺める。

建ち並ぶ高層ビル。中央に見えるのは管理局本部。

「…変わっちゃったもんだな。此処も、俺も、何処も彼処も皆足元ばっか見て歩いてやがる」

人が群がる通りを歩いている連中の大半は足元を見ている。

探偵が活躍していた当初は皆天気とあれば空を仰いですれ違う人には元気よい挨拶をし、人目につく所でバカみたいな理由で殴り合いをし、それを余興に酒を飲んでいた。

「確かに、足元を注意して怪我を防ぐことは大切だが、たまには上向いて歩かねーと、大事なもん忘れちまうぜ。なあ……」

ガジルは一人笑みを浮かべ、資料を風で散らばらない所に置き、非常口から屋上を後にする。

その資料の一枚目にはペンで『残念だったな』と書き込まれていた。

依頼 No. 2 8は出来ません（前書き）

ああ…文才とセンスが欲しい…
最近涼しくなってきましたが、お体にはお気をつけください

依頼 No. 2 8 は出来ません

機動六課

「今日の任務の内容は今問題になつとる違法デバイス流出の件についてや。

皆も知つとるかもしれんけど管理局のみに支給されるデバイスが民間人に渡ることや。

ティードさん、頼むで」

はやては一礼してマイクをティードに渡す。

ティードがマイクを手に隊員達の前に立つと隊員達の中から黄色い声援が飛んでくる。

ティードはそれを手で制し、違法デバイスの件について話し始める。

「この違法デバイス流出事件の担当になりましたティード・ランスターです

まずはこのデータを見てください」

ティードが指を鳴らすとホールに巨大なモニターが現れる。

またもや飛び散る黄色い声援、目を？にしたティアナが異様に頑張っているのは気のせいなどではない。

「これは違法デバイス流出事件の件数です。
ここ最近になって件数が増えています。

と、いうことは犯人が活発に違法デバイスを普及していることが分かります

これだけの件数であれば必ず証拠が出るはずです。

各分隊に別れ隊長の指示のもと犯人逮捕に繋がる証拠を掴んでください」

『はいッ!』

凄まじい勢いで敬礼をした隊員達は各自解散して各々隊長の指示のもとにチームを作っていく。

その光景にティードは肺に溜まっていた空気を吐き、額に浮かんだ汗を拭い取る。

（緊張した……こーいった事をするのは始めてだったからなァ……
…もっと、先輩みたいに貫禄が持てればな……後でアドバイスでも貰おう）

ティードは今頃ラーメン屋で腹を満たしている残念の後ろ姿を思い浮かべながら自分も捜査に参加するべく隊員達のもとに足を進めた。

ラーメン屋

「ヘイツ！超濃縮豚骨ラーメン」

「ほほう……こりゃまた」

年季の入ったラーメン屋。

知名度こそは低いものの、安定した味と風味で一部の客に大人気の店。

ガジルの前に置かれたのはこの店のチャレンジメニュー。

濃すぎる味と油と量からクリアするには一筋縄ではいかない。お値段1500円。

制限時間内に食べきった者は金を払わなくてもOK！

「しかし…最近物騒らしいなあ、ガジルの坊主」

「むああ、最近テレビで事件とか良く報道されてるからなあ」

「へへへ、うちが無事なのも坊主のお陰ってか！」

「全くだ。サービスぐらいしてもらいたいもんだぜ
ところで、最近変な噂とか聞いたことねエか？」

開始3分で残り三分の一のところまで食い終えたガジルの店長に話しかける。

店長は眉を寄せガジルの大人向けの雑誌を読みながら答える。

「…最近、客に変わった奴がいる……」

「…どーいった奴だ？」

「リストラされたやら離婚されたやらでバカ酒飲む客に妙に優しく接する奴でよ…」

食い終わる頃にや肩組んで店出て行く奴だ…いつか話そうと思ってたが…」

ガジルはラーメンを間食し爪楊枝で歯に挟まった物を取りながら眉を寄せる。

「そりゃ、変な奴もいたもんだなア…特徴は？」

「…服は来ることに変えてやる。

だがよ、ただのラーメン屋の店長の俺でも分かるぐれえ変な雰囲気出してやる」

「…なるへそ、そんじゃご馳走さん」

雑誌を奪い取ったガジルは流れるような動きで店を出て周りを見渡す。

人通りの少ない道。華やかな所といえは近くに見える遊園地。道行く者は皆二人組みのピンクオーラ全開カップル。

「…虚しいな」

ガジルは何処か遠い目をして電柱に止まるカラスを見上げる。此処へ来た際は路地に数羽ゴミ袋を漁っていたのだが今はいない。

「…ふむ。ちと遅かったか…一人で行っても虚しいだけだよなア…
かと言って行かない訳にはいかねエしよ」

「なにをしている」

大人向けの雑誌を片手にどうするか思案しているガジルの耳に凜とした声が響く。

ガジルはその声を聞き弾かれたように振り向く。

「シグナム！いやゝ会いたかったぞ！
ハグしようぜハグ！」

「…いつもに増して面倒くさいな…どうした急に」

声の主は私服に身を包んだシグナム。

「あり？なんでお前私服なの？」

「お前を探すためだ。管理局の制服に敏感だからなお前は」

「フツ……野朗が着るもんにや興味はない

俺が管理局の制服に敏感なのは角度を変えれば良い感じに逆三角形
が…

…お前、今デバイス持つてるか？」

「デバイス？…そういえば…忘れてきたかもしれないな」

私服の彼方此方を探すシグナムだが、デバイスは見つからなかった
ようだ。

ガジルは好機とばかりに微笑んでガツとシグナムの肩を掴む。

「シゝグゝナムゝ」

「な、なんだ急に……ま、まさか貴様っ／＼／」

「お前、今デバイス無いんだよなア…ただの女の子なんだよなア…」

「や、止めろっ！／＼／そこまで飢えていたのか貴様っ／＼／」

「嫌か？クツクツ…嫌だと言っても俺は無理やり連れて行くぞ…！」

「そこまで残念になったかこの外道！／＼見損なったぞ！／＼／」

「フハハハハハハ！なんとも言うがいいわ！行くぞ！」

「期待していた兄弟達。すまない。
この小説の上の方に15って書いてあるだろ？俺は8にはイケないんだ…」

「…誰に言っている」

シグナムがガジルに連れて来られた所はラブh……ではなく遊園地。
作者的にも心底残念ですが許してください。

「ところで、何故此处に来た？」

「ええ…デートだろ常識的に考えて」

「そこまで暇ではないのだが」

「ふんっ、強がりな止せ、分かってるぜ俺は、お前が暇だって事は」

「誰が暇だ。私はこうしている今も仕事をだな」

「黙りなツンデレ。さっさと見て回ろうぜ。

滅多に来れる場所でもねーんだしよ」

「あ、こら」

ガジルは大きな掌でシグナムの手を握り、歩き出す。

突然のことにシグナムは大きく目を見開き、俯きながらほんの少しだけガジルの手を握り返した。

（なんだ…普段は残念だがこういうときは意外と男らしいんだな…
…／／／）

（やべーよ…！女の子とこーやって手ー繋いだの初めてじゃねーのか！？

どどどどどどうするme俺我輩！？だ、だだだだだめだ緊張してきた！？

握り返されたしこれはもしかして任せたってことだろ！？オーウ…アメリカンジョークですか…

意味分かん！いや最初から意味など！僕等が生まれてくることには必ずしも意味があつてだからその）

…もはや言うまでも無い。この男、残念である。

しかし、確実に今話題の人気スポットに接近している。

何もありませんしたー、という壮大な落ちは無くなった。

数分無言で歩き続き行き着いた先は今話題の人気スポット。

”雄・刃・毛・夜・死・鬼”

此処は世界でも有名なお化け屋敷で、入った者の八割は意識を失いトラウマになるという噂だ。

「ほう…見せてもらおうか、お化け屋敷の性能とやら、を…?」

気づけばガジルの手は少し強めに握られていた。

どうしたのかとシグナムの顔を見ると、若干青ざめているように見える。

「…シグナム、お前もしかして」

「ち、違う！断じて違う！お化け屋敷が怖いとかではない！」

「…誰もお化け屋敷なんて言っていないんだが……」

「あ……うつ……ち、違う」

弱々しいシグナムを見たガジルはニヤリと笑みを浮かべる。

「ほう…まあさか、才色兼備主はやてをお守りする騎士様はお化け屋敷が怖いとでも?」

「なっ！／＼／＼、そんな事は」

「だァ…ったら並ぼうぜ?ほら、入る前からリタイヤしていく奴等が多いからすぐだぜ?」

「くっ……いいだろう。ただし条件がある!」

「ん…?なんだ言ってみーろ」

「…もし私が悲鳴を上げなかったら欲しいものを買ってもらおう！」

「上等。まあ、悲鳴を上げなかったら、な」

ガジルは酷くムカつく笑みを浮かべ、列の最後尾に行く。

二人に順番が回ってきたのは列に並んで10分もかからなかった。

そこまで怖いのだろうか、試しに入り口の方を覗いてみるが、昼間のはずなのに鳥肌が立つほど薄気味ぐらい入り口。

建物について分かる事はそれだけ、ビル5回ほどのお化け屋敷が黒い布で覆われているので一体どのような建物かは分からない。

「おいシゲン」

「……………」

ガジルは思わず心底呆れた溜め息を零した。

今のシゲナムの状態は目をコレでもかと閉じ、耳を両手でコレでもかと塞いでいる状態だ。

完全にシャットダウンして自分の世界に入っている。

大量の剣とでも踊っているのだろうか？

そしてついに二人の番が回ってきた。

シゲナムは相変わらずシャットダウンしきった状態。

「入った所に従業員が立っていますので」

「あ、はい。おいコラシゲナムさっさと起きろ」

「……………」

仕方がないとガジルはシグナムにそつと語りかける。

「…怖いのか？無理して引つ張ってきて悪いな。
どうしても、と言っのなら帰るが、どうする？」

「こ、怖くなど！」

「OK行こうサッサと行こう」

負けず嫌いな性格を逆手に取ったガジルは耳を塞ぐのに精一杯だったシグナムの手を握り中へと入っていった。

「うえるかむッッ！！」

「ッ~~~~~！！??」

お化け屋敷に入った二人を待ち受けていたのは目玉が片方零れ落ちている従業員。

作業服が血だらけなうえ、凄まじい迫力が籠った挨拶。

思わず叫び声を上げそうになったシグナムはガジルの手を強く握り
うずくまる。

「お二人ですか？」

「はい」

「それではこちらに」

「あ、目玉落ちましたよ」

「失礼しました」

一部を除き一般的な会話を済ませたガジルはシグナムの手を取り奥へと進んで行く。

中には日の光が入らず、支給された懐中電灯が無ければ何も見えない状態。

「…ほう、中々良い雰囲気じゃねーか

従業員も巧みだ。良い感じに気配を殺している」

「そ、そそそそそそつだな」

「… 噛m『ブラザアアアアアアアアアアアアアアアアア』……」

二人の前に飛び込んできたのは、どうやって動いているのか綺麗に半分に分かれた人間。

断接面もまたリアルで今の運動で腸が零れ落ちている。

『アイタカッタデゼブラザアアアアアアアアアアア』

『オレモダゼブラザアアアアアアアアアアアア』

『『ブラザアアアアアアアアア』』

「…人間、ああは成りたくないものだな」

「…お、お前……が、言う……なあ……」

綺麗に兄弟をスルーした後、ルートに従い歩き、二人は大広間に出た。

何処かの結婚式の会場を思い浮かべる大広間。

しかしテーブルも何もかもズスタスタに切り刻まれており、落下したのだらうシャングリラの下には血溜まりが出来ている。

「うーむ、思っただがコレは恐怖というか心臓を悪くするだけでは？」

「は、早く出よう……悪くなる前に出よう……」

「えー、もう少し見て回ろうぜー」

「なんで平気なんだ……天井から大量の生首とか首がもげたナースとか従業員が弾け飛んだり……」

「まあ、無駄にリアルだったわな。本物見た気分だったー」

「……見たことあるのか？」

「どうだったか。ま、今にも泣きそうなお前を見ているのもいいが、やはり美人はお天道様に照らされていないとな。これで最後にするか？」

ガジルの問いにシグナムは激しく頷きガジルの手を握り締める。
涙目＋上目遣いという必殺コンボをモロに浴びたガジルは少し顔が
熱くなったが、何事もなかったかのように奥に進む。

「この部屋は特に何も無かったな」

ガジルは赤く出口と書かれたエレベーターの前に立ち周囲を懐中電
灯で照らす。

「はやく…はやくしろお…」

「おい止める。結構エロく聞こえるから」

ガジルがエレベーターのスイッチを押した瞬間、扉が凄まじい勢い
で開いた。

扉の心配をしながら入るガジルの後を急いで追うシグナム。

エレベーターの中はいたって平凡。

良く見るような作りで明かりもついている。

安心したのか握りしめていたガジルの手を離すシグナム。

そんなシグナムを見ながらガジルは

「しかし……酷いことするなア…」

「な、なにがだ？」

「いや何でも」

スツ、と流れるような動きでガジルは自分の両耳を押さえる。

シグナムが何かとガジルの顔を覗こうとした瞬間、エレベーターの壁が無数の手に突き破られた。

壁を破った際に出来た生傷から鮮血と油が溢れ出る。

電灯の色も赤へと変わり、全方位から女性の生々しい声が響き渡る。

「……………！！！！！！！！」

エレベーターの中で表現できないほどの悲鳴が轟いた。

出口にたどり着き無事にお化け屋敷を通過した二人は近くのベンチに座っていた。

時刻はもう夕時、遊園地には何処か哀愁が漂っていた。

「いやゝ、楽しかったなゝ」

「……………」

「それにしても可愛い声で鳴きやがってゝこのムツツリ騎士様よゝ」

「……………ばか、かえる」

「なんだ？シリトリか？」

シグナムはガジルに背を向けたまま無言で立ち上がり立ち去ろうとする。

「送っていいこうか？」

言つとシグナムの背中中はピタリと止まり、また動き出した。

ガジルは苦笑をし、後に続こうと立ち上がる。

するとガジルの足元にサッカーボールが転がってきた。

転がってきた方向を見ると一人の少年が手を振っている。

ガジルは微笑みながらサッカーボールを手に取り、少年へと投げる。

「さて、条件は十分。お仕事と行きますか」

ボールを見事キャッチした少年にサムズアップしたガジルは哀愁を漂わせながら遊園地を去った。

依頼No.2 人が気にしてることを言うもんじゃない(前書き)

という事で依頼No.2終了です

しかしあれです。今回は何とも書きづらかった…

おかしくね?と思う方もいらっしゃると思いますがノーコメントで
(汗)

それではどうぞ!

依頼 No. 2 人が気にしてることを言うもんじゃない

「ティアナ！此処か！」

「はい！兄さん？」

人が全く寄り付かない裏路地。

散乱したゴミ袋。黒猫達からの敵意の籠った視線が二人に突き刺さる。

「報告があつたのは此処で間違いないはずだが……」

「犯人らしき人は……」

二人は背中合わせになりながらデバイスを起動し慎重に奥に進む。

先ほどティードの携帯に『危険物を持った不審な人物が現れた』とラーメン屋の店長から連絡が入った。丁度近くをパトロールしていた二人はすぐさま現場へ駆けつけたわけだ。

「……あれは？」

周囲を確認していたティードの目に裏路地から去る何者かの姿が目に入った。

何処かで見たことがある背中だが、ティードは迅速にその者を追おうと裏路地を疾走する。

すると、何かに躓いたのかティードのバランスが崩れ、転倒しそうになった。

「兄さん！大丈夫！？…って」

兄の無事を確かめに来たティアナはティーダが躓いたものを見、目を疑った。

ティーダが躓いたのは顔面にいくつものアザを作り、両足が完全にヘシ折られている、違法デバイスを持った中年の男。

「まさか…この人…！」

ティーダは急ぎ中年の男の私物品を漁る。

財布を中年の懷から取り出し、中身を確認する。

財布の中から身分証明書を取り出し、何者なのかと身分を確かめる。

「デバイスマスター……兄さん、この人前に話題になった」

「ああ、デバイスを使用して別世界からの来訪者を傷つけてクビになった男だ。

まさかこの男が違法デバイスを…逮捕する」

（しかし…問題は誰がコレをやったのかだ…

無駄な傷が無い…顔に一発両腕に一発ずつの打で完全にしとめている…一体誰が…

ん？これは…メモ？）

ティーダは現場の片隅にメモを発見する。

（やだ…何か腑に落ちない兄さんもカッコイイイエエエ…… / /

はっ…ダメダメ！トロけたらダメよ私！でもさっきの逮捕する、で…完全にキチャッタ…

私も逮捕して欲しい…… / / / だ、だめよ！ただの変態さんになっちゃうじゃない！)

妹は一人自分と戦っていた。

遡る事5分前

「アナタ…人生に疲れていませんか？楽になりたいですか？素直に答えて下さい…人は必ず心が沈むときがあるのです…そんなとき、優しく手を差し伸べてくれる人が、アナタのそばにいますか？」

「……………」

季節はずれの黒いロングコートを着た中年の男 違法デバイスを売却している中年の男は

一人の男を裏路地へと連れ込みそつと語り始める。

男の手口はこうだ、不安定な精神を持った者を誘惑する。

例えるなら麻薬。ただの麻薬などではない。即効性の麻薬。

「この世の全てを壊す気はありませんか？我々と共に…」

「お断りだな。生憎と男と添い遂げるような楽しい趣味は持っていないんでな」

目の前の冴えない男からの凄みの籠った声が中年の耳の中で響く。

中年の男は冴えない男から距離を取り、売却予定の二丁銃型デバイスを構える。

「…管理局じゃない、アナタ何者ですか？」

「まず自分から、と言いたところだが、俺はテメーのような奴の名前は聞きたいとも何とも思わねーんでな。お互い自己紹介は無しとしようぜ」

今まで中年の男が冴えない男だと思っていた者　ガジルは中年の男を睨みつける。

「まさか、ここまで素人だったとはな。まさか、こんな風に交渉を断ったら問答無用でその手に収まっている危険物をブッパナスのか？」

「…無論です。交渉に失敗したからには邪魔者同然ですから…殺す前に一つよろしいでしょうか？」

「なんだ？」

「どーしてアナタは私の交渉に応じなかったのですか？アナタからは負け組みのオーラが滲み出ていたはずだ」

「アナタは足元を見すぎなんだよ…だから、前から来る危険に気づかない。」

ざっとこの違法デバイス流出の資料を読んだが、管理局の追跡を全く許していなかったよ

そこまでは良かった。しかしだ、対象がどーにも分かりやすい。対象は読んだところ恋人や仕事をなくした奴ばっかだ」

「…それだけの情報で私に接触することは出来ませんか？」

「だから足元ばかり見てんだよお前は。」

かつて管理局と絡んでたアンタなら、管理局がどーいったルートで犯人を引っぱたくか知ってんだろ？

管理局にばれないように、そればかりしか頭に入ってねーからな。管理局とは離れて捜査を進めている俺の存在に気づかなかった」

ガジルは近くにあるゴミ箱の蓋の上に腰を下ろし、腕を組む。

「聞いたところによると、アンタはこら辺で活動しているみてーだな

まあ近くにカップルが集う遊園地もあるしな。そこに行つて、フラれてショック受けてる奴に優しく接して違法デバイスを渡す。クッククク…どうやらお前は俺とフラれた奴と勘違いしていたようだな」

そう。ガジルがシグナムを無理やり遊園地に連れ込んだのは犯人に餌をまくため。

しかしそれだけでは犯人は何らかの方法でシグナムが管理局である証、デバイスを所持しているかしていないかを見極め引いていた。だが幸いなことにシグナムはデバイスを所持していなかった。

そして決め手はあの別れかたとガジルが漂わせる残念オーラ。

「フン、この俺に女の子に嫌われるようなことさせやがって…」

アンタの敗因は管理局ばかりに目が行ってターゲットの危険性を忘れていた事。

まっ、一言言つてやれることがあるとすれば…」

刹那、裏路地に銃声が響いた。

業を煮やした犯人がついに引き金を引いたのだ。

しかし犯人が引き金を引くことを分かっていたガジルは犯人が引き金を引く瞬間、足元に置かれたゴミ袋を蹴り上げ自身の身を隠し、弾丸を避けた。

「残念だったな」

完全にガジルの間合いに入った犯人は一度距離を置こうと飛び退ろうとするが、ガジルがそれを許さない。

犯人の利き手である右腕に目掛けて蹴りを放つ。

鍛え上げられたガジルの右足による豪快な一撃。

犯人は成す術もなく蹴りをモ口に食らい、呆気なく右腕を折られてしまった。

「ひいつ！」

激痛と恐怖によりその場に倒れこむ犯人。

震える左腕で銃を構えるが、銃口がガジルの眉間を捉えた瞬間、ガジルの右足による薙ぎの蹴りにより腕は拉げ、デバイスも壁に叩きつけられた。

「あ、ああ、あなたに言われたくは」

[illegible]

少し気にしてんだからそこらへんは察しろよド素人がああああああ
あああああ！」

ガジルの逆鱗にタッチしてしまった犯人の顔面に容赦の欠片も感じられない右拳が入った。

宙を舞う数本の折れた歯、鼻の骨が折れると同時に噴出す鼻血。顔を歪められた犯人は後方へ吹き飛び、蓋の開いたゴミ箱の中に綺麗に納まった。

「これはオマケだ」

犯人が入っているゴミ箱の軽く蹴る。

するとゴミ箱の中に納まっていた犯人が地面に転がり、その後を追うように大量の汚物シャワーが気を失った犯人に降り注いだ。

「…あーあ、ただ働きしちまったなあ」

大きく口を開け欠伸をするガジル。

夕飯は何にするか、と冷蔵庫に叩き込んである食材を思い浮かべ献立を考える。

いつもの事だが、足取りが重い。

疲れて帰ってきてても待つてくれる人もいなければ優しく接してくれる人もいない。そのうえただ働きだ。

「ん？」

気がつけば事務所の前、ガジルは二階に構える自宅を眺め、異変に気づく。

「誰がいる…」

いつも一人だけの家、しかし今日は違った。

何かがいるのだ。直接目で確認したわけではないが、気配に敏感なガジルは事務所から伝わってくる気配を完全にキャッチしている。

「何処のどいつかは知らんが、俺のエロ本を盗もつとするなんざ大した根性だ。

野郎だつたら潰す。レディーだつたらペロペロしてやる」

ガジルは後者を期待しながら事務所の扉を開ける。

すると漂ってきたのはコゲ臭い匂い…もしかやとガジルは急いで事務所の中へ入る。

「誰だ!？」

「こっちの台詞だ!人様の家を燃やそうとする不届き者は!…ってシグナム?」

煙が充満する台所に立っていたのはエプロンをしたシグナム。

その手にはこれでもかなほど真っ黒になったフライパンとそれに焼かれた不幸な食材。

辺りも散らばっており、色々大変なことになっている。

「…おかえり」

「…ただいま。って何やってんだ?」

「見ての通り料理だが?」

「嫌がらせの間違いでは？」

「むっ、人の好意を嫌がらせと言うのか」

「いや…だって台所が…」

シグナムは足元を見る。

散らばった調味料、割れた皿、不要な食材。

「…これは、あれだ。副作用だ」

「なんのだ！？てゆーか、何でお前がいんだよ」

ガジルは呆れた様子で窓を開け、換気扇を入れる。

すると台所に充満していた煙が晴れ、散らばった台所が姿を現す。

「…これは…ヤレヤレ…」

酷く疲れた様子でガジルは雑巾を何処からか取り出し、台所の掃除を開始する。

そんな中、申し訳無さそうなシグナムの顔を見たガジルは皿を一枚取り出しシグナムの前に置く。

「腹が減ってるんだ。早く盛ってくれ」

「しかし…」

「早く盛れ」

命令口調に変わったガジルの言葉に逆らえずに戸惑いながら皿に焦

げた料理を盛る。

料理を盛り終わった頃にはガジルの掃除も終わっており、台所が使用前のようになっていた。

「さ、食べようぜ。腹が減っているんだ」

台所を立ち去るガジルをシグナムは料理が盛ってある皿を持ちながら追いかける。

ソファーに座ったガジルはマイ箸を取り出しシグナムの料理を口にする。

「お前、料理初めてか？」

「…不味いか？」

「いや、初めての割には良く出来た方だろうよ。俺の好みの味だ」

事務所に静けさが訪れる。

聞こえてくるのはガジルが料理を食べる音だけ。

「さっきの質問に戻るが」

静寂を切り裂いたのは料理を食べ終えたガジル。

「なんで料理を？しかもうちで」

「それは……遊園地であんな別れ方をしたから……その……」

「あ？なんだって？」

「な、なんでもない！／＼寂しがってるだろうと思ったただけだ／＼」

「…そうか、ありがとうよ。」

あーあ！毎日『おかえり』なんて言ってくれればなー」

「へ？／＼毎日？／＼／

（毎日『おかえり』…だと？それはもしや良く見る「俺に毎日美味しい味噌汁作ってくれ」というプ、プププポーズのような／＼／」

「ああ、毎日だ

（疲れて帰ってきてても誰も迎えてくれないのは寂しいからな）」

壮大な勘違いをしているシグナムの携帯が鳴る。
こんなときに、と心の中で毒づき、携帯に出る。

『シグナムさん。違法デバイスを流出していた男を逮捕しました！』

「なに本当かティーダ！？」

電話をかけてきたのは気絶した犯人を逮捕したティーダ。

シグナムがティーダの名を口にした瞬間、ガジルは皿を持って台所へと向かった。

「お手柄だな」

『…いえ、それが。何者かに気絶させられていたところを発見して…』

「誰か分かったのか？」

それが…手がかりも無く。あつたのはメモ。

書いてある内容は、『コイツは三下の素人。気を抜くな』とだけ……』

「まだ黒幕がいるということか：分かったまた後で」

シゲナムは携帯を切りソファアに踏ん反り返っているガジルを見る。

「犯人が逮捕されたそうだ」

「おっ、それはそれは。管理局は仕事が早い」

「そ、それでだな……／＼／」

「……どした？モジモジして？」

やけにモジモジしたシグナムは意を決したかのように言う。

「報酬だ！私を貰え！（世話とか料理的な意味で）」

「ヴェエエエエエエエエええ！！？そういえばそうだったアアアアアアア！！（もちろん【ズキューン！】的な意味で）」

そう。依頼の報酬は（世話的な）シグナム。

勘違いしているガジルはアタフタと動き回り大人向けの雑誌を頭に被る。

（なんだ…この反応は？照れ隠しか？先ほど「俺好みの味だぜ」毎

日作ってくれ（キリッ）と言っていた…そうか、照れ隠しか。残念のくせに可愛いところもあるのだな）

（あ、そうじゃん！なにやってんだよ俺！犯人をマリアナ海溝にぶちまけておけば良かった！いや！決してシグナムのこと嫌いとかじやなくて！あああああ！どーすりやいいんだよ！？いざって時に動けないヘタレなのか俺は！！…そうだ！）

「ふっ、シグナム。まだこの事件は解決していない。
さっきお前等の会話を聞いたが、まだ黒幕がいるそうじゃねーか。
お、お楽しみはそれが終わったあとで」

「…確かに」

シグナムはつまらなさそうな顔をし、身支度を始める。

「あ、でも」

「なんだ？」

玄関に立ったシグナムは振り向く。

「たまには料理を作りにきて欲しいなー、と」

ガジルの言葉を聞いたシグナムは赤くなつた顔を見られぬようにコクリと頷いた。

依頼 No. 2 人が気にしていることを言うもんじゃない（後書き）

残念「エロ本頭に被るって、俺は変態か」

いやアンタは残n（殴

依頼 No. 3 最近の子供は物騒で怖い（前書き）

どうもドナドナです。

最近熱中症が流行っているそうなので、お体にはお気をつけください

依頼 No. 3 となりましたが、今回は何時もと違うような
まあいいでしょう。それではどうぞ

依頼 No. 3 最近の子供は物騒で怖い

「エリオ、キャロ、今晚なに食べよつか」

「はい！ハンバーグが食べたいです！」

「あ、エリオ君私も！」

「うん、じゃあ今晚はハンバーグにしようか？」

「「はい！」」

「キュルクー」

都市クラナガン。

そのクラナガンの街を一組の家族が和気藹々と会話を弾ませながら歩いている。

エリオもキャロも家族に捨てられ、管理局でその事件を担当したフایت・T・ハラウンが身寄りの無いエリオとキャロを拾った。普段は三人とも管理局で勤めているが、今日のような休日の日には予定が無い限り三人で楽しく過ごしている。

「あ、猫が」

「本当、こんな街中に…珍しい。飼い猫かな？」

三人の前方に、歩道で堂々と昼寝をしている猫の姿があった。周りの者全てを和ませるようなトロンとした顔で昼寝をしている。

「触つてみても大丈夫ですかね？」

「フリード、
噛んじゃダメだよ？」

「キアルクー！……キュ？」

キャラの頭に乗っているフリードに、電撃が走る。

まるで二〇一タイプ顔負けの反応でフリードは視線を変える。

刹那、三人の頭の上を舞う一冊の大人向けの雑誌。

読みふけているのか角はボロボロで表紙の色も薄くなっている。中身は…大きくは言えないがね縄を持った女王様が写っているとだけ言っておこう。

「見イイイイイイつけたアアアアアアアアアアア
アア！！！！！」

刹那、叫びと共に一陣の風が走る。

強風により捲くれ上がるフェイトとキャロのスカート。

筋肉なんたらに如く昼寝をしている猫の体をキャッチした男　ガ
ジル・アルタレッタは頭上から降ってくる趣味全開の本を片手でキ
ャッチし、しかとスカートの奥に隠された秘境を目に焼き付ける。

「ちっ……ストッキングか……しかしイイものを見たな。」

全ては貴様のお陰だ。三丁目の田中さん家の突然行方をくらませた飼猫。

「貴様もまた……猫であつた……」

「ニャアアアアアアアアアアア！」

某世紀末覇者の如く猫を持った拳を突き出したガジルは暴れる猫にそつと微笑む。

「さあ、飼い主がテメエの帰りを待ってるぜ…
それとサンキューなそこのお二人さん。お腹一杯です」

いきなりの出来事に三人は呆気に取られ、ただ暴れ狂う猫を宥めるガジルを見つめることしか出来なかった。

「いやゝ、ありがとね探偵さん」

「ハッハッハ！こんなもん朝飯前ですよ田中さん！」

「ふふふ、それじゃあね」

玄関で猫を受け取った田中さんに別れを告げたガジルはご機嫌なのか鼻歌を歌いながら事務所の中へ入って行く。

お疲れ様の一言をかけてくれる人物は今はいないが、夕時になれば買い物袋を手に提げ事務所のドアを叩くだろう。

「…あれ？うちってお料理教室だっけ？」

どうでもいい疑問が浮かんだことに苦笑しながらガジルはソファ―に横になりテレビをつける。

「昼ドラは好きになれんなあ……」

チャンネルを変えるがピンとくる番組は放送されていない。

「……久しぶりに見てみるか……」

ガジルがチャンネルを変えると、画面一面に『THE・管理局』の文字が映り、管理局の看板番組『THE・管理局』が始まった。一礼して今日の出来事を読み始める女性アナウンサー。

「……なんだ、始まった後にやる『今日の一言』なくなったのか……あれ結構気に入ってたんだがなあ」

気に入っていた企画が無くなっていったことにショックを受けながら報道を見る。

この前の違法デバイス流出事件の犯人が捕まったが、以前違法デバイス流出は止まっていなかったようだ。

「こんな早くに解決すりゃ問題になんねーだろ……」

ブツブツと言葉を発しているが画面の隅々にまで目を通すところは職業柄からだろうか。

そんな中、客間に呼び鈴が響く。

「お、今日は絶好調だな～
ハイハイ今出ますよ～」

鼻歌交じりで玄関の扉を開けるガジル。

「あ、先輩こんにち」

客人を見た瞬間、弾かれたように扉を閉め事務所に戻ってゆくガジル。

「ちょ！先輩！僕ですよティーダですよ！」

「此処に居るのはMr・超絶イケメン仙人だ」

「そのフレーズは聞き飽きました！扉開けてください！」

「だあー！うつせエエなツ！何の用だゴラァ！勧誘ならシグナムで間に合っただよサッサと帰って近親相姦に身を委ねてやがれシスコンお兄ちゃんよ！」

「誰がシスコンですか！？いいですか僕は！」

「うるせーシスコン！俺はどっちゃかってーとお姉ちゃん派だから！妹派なら五丁目の石田さんの倅が興味心身だから語り合って来い変態共！」

「アナタが言いますかそれ！？というか石田さんに謝って！」

石田さんをも巻き込んだ口喧嘩。

訪問者　ティーダは溜め息を吐きながら扉をノックし続ける。

ガジルは意地でも出ないつもりなのか鍵を掛け大人向けの雑誌を読み自分の世界に入り込んでゆく。

「先輩！協力してほしい事があるんです！」

「出来ませんでしたー…」

結局抵抗する事が出来ずに…いや、軽くデコピンしお返しとばかりに飛んできた鉄拳を顔面にモロ浴びその隙に入られたガジルは酷く頂垂れながらテ○リスをしている。

「あ、やった40万」

地味に高い記録を叩き込んだはずなのに素直に喜べない状況。

「先輩」

「…ぶ○ぶよしよ」

「ガジル。お前のお気に入り全てに火が灯るぞ」

「何の用だ」

ガジルは洪々ゲーム機の電源を落とし、ソファーに踏ん反り返る。

「実はアナタに依頼するよう頼まれたんです」

「あ？」

ティードが持っていたのは一通の便り。

それを受け取ったガジルは疑問に思うことを口にする。

「…なんでまたヤヤコシイ事を…」

「さあ？偶然前を通りかかったら十歳ぐらいの女の子が…」

「十歳か……ギリギリ、射程距離だ」

え？なにコイツ？のような視線を送られながら事務所の窓から外を見る。

「ティード、その電柱の裏に隠れてる女の子呼んで来い」

「あ、はい」

ティードは頷き事務所を出る。

それを確認したガジルは台所へ行きオレンジジュースと柿〇種を持つてくる。

「…鍵を閉めないのか？」

「ん？生憎と女の子からの依頼を断れるように出来ていないんでな」

「むう……」

「なんだその顔は、もしかして閉めて欲しかったのか？」

「まあな」

「え？何時に無く素直だなおい」

「料理を教えてくれると言ったのはお前だろう」

R-18を期待していたガジルは、まあこんな残念にそんな度胸があるとは思えないが、ちょっぴり期待していたガジルのテンションは少し下がる。

それと同時に玄関の扉が開く音が響いた。

「ばっ！止める！アタシは別に会いたいなんて！」

「でも連れて来なきゃ仕事受けないって探偵さんが」

「誰がそんな事言った誰が」

無理やり事務所の中に入れようとしていたティーダの頭に拳骨を落としたガジルは赤毛の少女の前に視線を合わせる。

「さ、取りあえず話は聞け」

「誰がアンタみたいな奴に」

「お嬢ちゃんに言っていない…」

「おーい！そこのお嬢ちゃん！ちょっとこっち来い！」

ガジルが一言発すると、もう一人隠れていたのか、紫色の髪を持つ少女が顔を出し、ガジルの顔を確認するとトコトコと事務所の玄関までやってきた。

「お！…確か、ルーちゃんだったか！」

「ガジルおじさん？」

「お兄さんと言っておろうが。
さ、立ち話もなんだ、中に入ってるよ」

紫髪の少女、ルーテシアはコクリと頷き事務所の中へ入ってゆく。
隣に立つアギトは目を丸くしながらルーテシアの後を追ひ、履物を
脱ぎ捨て事務所の中へ入ってゆく。

「ふう…さて、もう用とやらは済んだらう？
ホレホレ帰った帰った。可愛い妹が待ってるんだらう？」

「はあ…シツレイシマシタ。
あ、それと先輩」

「んだよ。告白以外なら聞いてやる」

「…そろそろ、戻ってきてもいいんじゃないですか？」

ティードは気まずそうに視線を反らす。

「…翼を？がれた鷹は二度とあの空を翔けることは出来ん。
まっ、案外地を這うというのも中々良いものでな…情けない話だが、
俺は移り変わる空を見上げることしか出来ない」

少し喋りすぎたな、と後付しティードの頭に軽く拳骨を落とす。

「空も、嫌いじゃなかったんだがなア…」

そう言い残しティードに背を向け事務所の中へ入っていくガジルの
姿はどこか弱く儚かった。

「ルーちゃんお待たせ」

「死ねおっさん！」

「10秒遅れただけで死ねなんて…
最近の可愛い子ちゃんって怖いな…」

ソファーにちよこんと座ったルーテシアは出されてあつたオレンジジュースの入ったコップに口を付ける。
それを恨めしそうに眺めていた赤髪の少女　アギトの姿に気づき、ガジルは台所からもう一杯オレンジジュースを持ってくる。

「で、どうしたんだいルーちゃん。
まだ暗くなってないから良いけど、夜になったらアレだよ？喧嘩ばかりしてるから」

本当に分かっているのか、オレンジジュースを飲み干したルーテシアはコクリと頷く。

「…ガジル。誰だこの子達は…まさかの時は即刻逮捕だぞ」

何故かエプロンをしたシグナムはガジルの隣に腰を下ろし、目の前に座る二人の事を尋ねる。

「まさか、こっちの赤毛の少女は知らんが、こちらの紫の子は俺の昔の仕事仲間の娘さん。」

良く遊んでやってやったからな、結構親しいぞ。しかし、俺の家を知っているとは……

と、それよか本題に移りましょうかお嬢様方」

ガジルは懷に収めてあつた便りをルーテシアに返す。

「……何でまたこんな事を」

「……おじさんって知ってたら、こんな渡し方しなかった」

「え？ だけど看板にでっかく俺の苗字書いてあるじゃん」

「……………」

「……もしかして、誰でも良いから頼みたくって、そんなときあのシスコンとバツタリ会い、丁度事務所の前を通つてたあのシスコンが俺の所に渡した、と」

ルーテシアはコクリと頷き、便りを開ける。

ガジルに頼みに来たわけでないのなら、誰かのお使いか？

便りを開いて渡されたガジルは便りの内容を静かに読み上げる。

「えー何々。」

『母上の命は預かった。返して欲しかったら三日後の午前2時に指定された倉庫に現金で30億持つてこい。もし管理局が関わっている事が我々の耳に入ったら母上の命は無いと思え』

……………」

沈黙がオブラートのように事務所を包み込む。
ガジルは無表情のまま大人向けの雑誌に目を通す。

「ルーちゃん、もう遅いから晩飯食ってけ。
後で家を送ってやつからよ。シグナム、一緒に飯を作ろう。
教えてやれるし早くできるし、一石二鳥だ」

「現実逃避をするな！命がかかっているんだぞ！」

現実逃避を計画していたガジルはシグナムの喝によって無理矢理現実に戻された。

「現実逃避もしたくはなる。こんなボロツチイ事務所に命がかかった誘拐事件？しかも30億？分かつてのとおり残念にそんな大金は無い。」

「いやいやいや！俺にそんな金があると思ってんの？
これは流石に管理局さんの仕事だろ！？」

「しかし…管理局が関わったら母上の命がないと…
このご時勢だ。どんな手段で我々を監視しているか分からない…」

「尚更だろ！ご時勢だか何だか知らんがご自慢の技術力で何とか「
ガジルおじさん」……」

目に飛び込んできたのは今にも泣き崩れそうなるルーテシアの顔。

「お母さん…このままじゃ…」

良くここまで持ったものだと思えてやりたい。
通常ならこの便りを受け取った時点で何が何なのか分からずただ立

ち尽くし、次第には泣き出しているだろう。
しかしルーテシアは耐え、助けを求めた。

恐らく、ルーテシアを支えてくれたのがアギトだろう。
先ほども精神が不安定なルーテシアに代わってティーダにこの便り
を渡し、尚且つ迷い無く事務所の中にまで入ってきてくれた。

「……レディーにサービスが…俺のモットーだ」

大人向けの雑誌を勢い良く閉じガジルは台所へ向かう。

「その依頼、確かに受け取った。

ルーちゃんの母ちゃんには借りもあるからな」

言い終わると客間から礼の言葉が飛んてくる。

それに片手を挙げ応えたガジルの隣にシグナムが立つ。

「…どうするつもりだ」

「どーもこーもねーよ。

ただ助ける。それに順序は存在しない。助けたという結果だけがある
だけだ。

言っておくが、今回の俺はマジだぜ。誰にもお前にも、残念なんて
言わせねーよ」

「…そんな柿〇種がビッシリついた顔で言われても…頭から残念じ
やないか」

「やかましい!」

依頼 No. 3 夜の街は危険だから歩くな（前書き）

更新が遅れ申し訳ないです…

言い訳になるかもしれませんが、毎日毎日朝早くから仕事で手が回らない親父の代わりにアラホラサツサと……帰って来る頃には辺りは真っ暗ボディーは限界…

もうボディーチェンジするしかないです…

ホント、私は戦闘描写が酷いです…

さらには次回で全ての疑問を解決という…期待している方は少ないとは思いますが、精一杯頑張らせてもらいます

それでは、どうぞ

依頼 No. 3 夜の街は危険だから歩くな

「カッコをつけてみたものの…どうすっかなー…」

ガジルは一人大人向けの雑誌を楽しみながら、クラナガンの街を歩く。

天候は雲一つ無い晴天。嵐の前の静けさにも似た空気が流れている。

「もはや探偵じゃなくて便利屋になってる気が……」

あ、この娘胸デカクなったか？」

本当にどうでもいいことを呟きながら都市を歩く大男は何時管理局に捕まってもおかしくないほど不気味で異質だ。

そもそも何故クラナガンの街をぶらついているかと言うと、簡単に言えば証拠探しだ。

管理局が関われない以上、今のガジルに手がかりというモノが無い。

今ガジルが向かっているのはルーテシアの母、そしてガジルの友人であるメガーヌの家だ。

メガーヌの家は管理局が関わっていないので犯行現場がそのままになっているはず、犯人が証拠隠滅のミスを犯していればの話だが、その場合重要な手がかりを入手出来るかも知れない。

「…ま、そう簡単に手に入れれる訳ねーよなア……」

ガジルの視界に広がったのは何度か訪れたことのあるメガーヌの家の玄関。

綺麗に整えられた靴棚。犯人が侵入した形跡は見当たらないが、床に溜まったホコリと靴棚の上に置かれている花瓶の水が少なくなっている事からメガーヌの家には誰も侵入していないことが分かる。

ルーテシアとアギトはあれから事務所でシグナムの世話になっているはず。

合鍵を貰ったガジル以外に侵入した者はいない。

「これはこれでおかしな話だな」

合鍵を使用したということは鍵が掛けられていたということ。

誰が？メガーヌは恐らく部屋の模様からして何の抵抗も出来ずに捕らえられた可能性が高い。

と、いうことは鍵を掛けれるのは犯人のみ。

「…ふむ」

一通り家全体を調べてみたが、玄関も含め進入の痕跡は見つからない。

「ここまで完璧に進入するたァー、管理局が調べても分かるかどうか」

ルーテシアの話聞くには家にいるはずのメガーヌからの応答がないことに気づき、急いで家に戻ってみたところ、便りを何者かに渡され拳動不振のルーテシアの所にアギトが来た。

「……此処には何も無し、か。
あるのはアップルパイだけか…」

心当たりを探そうにもルーテシアには分かる事ではない。
参った参ったと呟きながら玄関に戻るガジル。

「なら、こつちも調べ方を変えてやるだけだ」

「なあ、ルールー」

「なに？」

事務所の来客用のソファーに寝転がっているアギトは、事務所の奥にある部屋から持ってきた本に目を通すルーテシアに話しかける。

「本当にあのおっさんに任せて大丈夫だったのか？
探せばもっと良い人もいるはずだろう」

誰もが思う質問だろう。

「探してもおじさんほど良い人なんていない。
昔からおじさん、私のお願い事は絶対に聞いてくれるから」

「でも…」

「ママも、おじさんは凄い人だ、って言ってた」

「ふーん…」

ルーテシアの言葉からは嘘を感じられないものの、アギトは未だ半信半疑だ。

アギトからすればガジルは、ただ喧嘩が強そうな変な奴、の認識が九割だ。

「何を話しているんだ？」

「あ、シグナム」

アギトはソファーに座ろうとしているシグナムのために身を起こす。

「あの変なおっさんってちゃんと仕事するのか？」

「変なおっさん？ガジルのことか？」

変なおっさん呼ばわれされているガジルの顔を思い浮かべ思わず吹きだしそうになるシグナム。

「だって全然シツカリしてないし」

「分からんこともないが…仕事はしっかりしていると思うぞ。

私が知る限り依頼はちゃんとこなしている」

相槌を打ったアギトはぎこちない動きでシグナムの膝を枕にして再び寝転がる。

「へへへ、女の人ってこんな感じなんだ」

「なんだ、膝枕は初めてか？」

「ううん。膝枕はアタシがお世話になってる人に何度かしてもらったことあるけど、女の人にしてもらうのは初めてなんだ」

「……母親は？」

「いない。気がついたら旦那のそばにいたんだ」

「…すまん」

「いいよ。だって旦那は少し年取ってるけど、此処のおっさんより凄くカッコよくて、シツカリしてて、凄く優しいんだ」

得意げに話す顔には笑みが浮かんでいるものの、どこか寂しげな色も混じっている。

そんなアギトの頭をシグナムはそつと撫でながらアギトの話を聞く。

「ねえ、気になってたんだけど」

「なんだ？」

「シグナムとおっさんってどんな関係？」

恋人？もしかして、夫婦？」

突然頭を撫でる速度が上がったことに気づいたアギトは何かあったのかとシグナムの顔を見る。

シグナムの顔は今にも火を噴きそうなほど真っ赤になっている。

「ど、どうしたの？」

「い、いや……ア、アギトはどっちだと思った？／／／」

「うーん……夫婦かな？」

だって合鍵とかも持ってたし、おっさんの扱い方慣れてたし、買い物帰りだったし……」

「……………そうか／／／」

「で、どっちなの？」

「それはだな…その…「ただいまー」！こ、この話はまた今度だ！／／／」

「で、手がかりは見つかったのか？」

「んー？んー」

まだ顔が紅潮しているシグナムは寝転がりながら大人向けの雑誌を読んでいるガジルに話しかける。

「いやね、手がかり云々は関係ねーんじゃないか」

「は？犯人の身元が分かれば対抗策も…」

「犯人は侵入の痕跡一つ残していない、アブナイ連中だった」

ガジルの手の抜きように思わず拳を握り締めたシグナムだが、ガジルの視線の先が大人向けの雑誌に向けられていないことに気づく。視線の先にはルーテシアを元気付けようとしているアギト。

「…どういうことだ」

「……さあな…お前はあの子の傍に一緒にいる。
今日はあの子達を泊める。お前も泊まれ」

「…一応聞くが、お前はどつする」

「フツ、夜の街を歩くのも一興。
注意しておくが、あの子の前では…」

「何も喋るな、か？」

「いや、喋れ。」

「ただし俺のこと以外だ」

シグナムはガジルの言葉に疑問を覚えるも、いつもと口調が違うことと、ガジルの眼の鋭さに気づき、黙ったまま頷き、二人の所へ向かった。

時刻は丁度午前二時。

海に面している工事現場にもはや人気はなく、静寂だけが漂っていた。

今宵は月の姿は無く、辺りを照らすはずの街灯も故障しているのか点滅を繰り返している。

そんな工事現場の先には一目で機動していないと分かる天井に穴が空き、波の影響で錆び付き、今にも崩れ去りそうな壁がある工場。その工場の入り口付近に門番のように立つ影が二つ。

「…誰だ」

入り口に立つ影が暗闇に潜む気配を感じ取る。

もう一つの影は獲物、双剣を構え戦闘態勢に入る。

「いやはや、参った参った。

まーさか気づかれるとは」

静寂を切り裂くような笑い声を上げ現れたのは、サングラスをかけたアフ口頭。

一体誰なのか分からないが、声からして十中八九ガジル。

何故こんな格好をしているかは謎だが、手に大人向けの雑誌を持っていることから判断するにガジルも本気になっていることだろう。

「貴様…何者だ？」

「ただのイケメンだ」

ガジルが言葉を発した瞬間、獲物を構えた影がガジルに斬りかかる。雲の合間に覗かせた月が、月光を反射させガジルの切り裂かんとする双剣と、その主を照らし出す。

「ほう、可愛い子ちゃんじゃねーの」

ガジルは迫り来る刃を避けずに、両手で双剣の主、綺麗に伸びた栗色のロングヘアーの女性の手首をしっかりと掴み取る。

「まーさかこんな可憐な子と出会えるとは…たまには夜の散歩も良いな。」

「どうだい？その子、も！」

ガジルは掴んでいる手から一本剣を強引に奪い取り、連絡を取ろうとしていたもう一つの影が持つ端末へと剣を投擲する。

凄まじい速度で投擲された剣は見事に端末を貫き、そのまま今にも崩れ落ちそうな工場の壁を砕く。

「良い切れ味、しかし脆い壁だ」

壁が崩れ去ったと同時に迫った拳を後方に倒れるように体勢を崩しながら避け、捕らえていた手を開放する。

すかさず距離を取ろうと、後方に大きく跳ぼうとしていた女性。しかし大きく跳ぶため振り上げた両脇にガジルの両脚が下から持ち上げるようにして捉えた。

体を支える足の代わりに両手を地面につき、倒れる勢いと両足の力を使い、両脚で捉えた女性を後方へと文字どおり、飛ばす。

その隙を突いたもう一つの影は、体がくの字に曲がったガジルに腕から現れた刃で切り裂こうと腕を振り下ろす。

「よっ」

しかし瞬時にガジルはその体勢を崩し、片腕で全身を支えながら左脚で影の刃に触れないように腕を受け止め、更に右足で左脚が受け止めた右腕を刃に触れないよう第一関節に巻きつける。

そして余った腕で宙を舞う女性が投擲した剣の柄をキャッチし、自由な左腕で振り下ろされた刃を逆手に持ち直した剣で受け止める。

「はっ」

体を支えていた右腕を曲げ、右腕の力だけで体重100近くの自身の体を宙に浮かせる。

その際絡めていた足を解き、相手の右腕を支えていた左脚を伸ばしきり相手の腕を弾き宙を舞う。

「そらっ」

宙を舞ったまま左手で握り締めた剣を、故障した街灯の根元へ投擲する。

壁を崩すほどの威力を持った剣はアッサリ街灯を切り裂き、支えが無くなった街灯は、先ほどガジルが押さえつけていた紫色の髪を持った女性に向かって倒れる。

「チッ」

追い討ちをかけようにも倒れてくる街灯を防ぐ手段が無い。

そう判断した紫色の髪を持つ女性はガジルから距離を取り、栗色の髪を持つ女性と並ぶ。

「ハッハッハ！いいねエ！

必死になって俺を始末しようとしてるこたア、あの工場に何かがある訳だ！」

「…それがどうした」

「いや悪い今の嘘。

本当はあの工場に何も無いんだろう？」

「……………」

「ダンマリか…まあ良い、今は楽しもうぜ…」

ガジルは普段からは思い描けないほど邪悪な笑みを浮かべた。

依頼No.3 酔っ払ったまま玄関で寝るな(前書き)

…爪剥がれました…しかも一気に三枚…さよなら僕の左足…orz
さて、鬱なまま書かせていただきましたが、この事件もNo.2の
ように後々物語と関わっていきます。

それから次回は本編の方が40万PVとこのことでのちらの方で番外
編をやらせていただきます。

無いとは思いますがリクエストなどがあればどうぞ

それでは依頼No.3をどうぞ

依頼 No. 3 酔っ払ったまま玄関で寝るな

月明かりが照らしたガジルの邪悪に満ちた笑みに戦慄を覚えながら各々武器を構える。

「そうバッチリ身構えんでも良い…俺はレディーにはかなり優しいからな。」

その美しい体には傷はつけないよ」

その言葉を発すると、ガジルは徐に手をアフロの中に突っ込み、何かを取り出す。

取り出したのは手榴弾に良く似た形状の何か。

「食らえお手製煙玉ッ！」

ガジルはご丁寧に「お手製」と書かれた煙玉を地面に投げつける。

激突と同時に三者の視界を奪う煙、否、コショウが瞬時に一帯を覆う

「待て！逃げる気、くしゅっ！」

「逃がさな、くしゅっ！」

「ふはははははは！個人的にはもつと君達と遊びたかったがア！残念ながら先約があるんでなア！そんなときやもつと仲間引き連れて一緒に遊ぼう！」

サアアラアバアアー！と辺り一面に皮肉な声を発し、ガジルはすぐ隣に見える海へ、近くにあったドカンを投げ捨てる。
ドカンは水しぶきを上げ、けたたましい音を響かせる。

「海へ逃げたっひやむ！」

「追うつぷっ！」

二人は目に入ったコショウを涙目で取りながら海に落とされたドカンをガジルだと判断し、海へ飛び込む。

「…なんか和んだなー」

やたら不規則な形をしたサングラスはこれを予想していたのか、コショウが晴れるとサングラスを外し大きく息を吸う。
二人は何処まで行ったのだろうか、海面に影はなく、静かな波が押し寄せている。

「さーで、どーゆーことか説明願おうか」

ガジルはアフロを外し、今にも崩れ去りそうな工場の奥に立つ紫色の髪をしたルーテシアに良く似た女性、メガーヌに問いかける。

「……………」

「やっぱり、何もなかったな。人質なんて何処にも…
安心してくれ、事前に監視カメラ等は弄らせていただいた」

ガジルは警戒した様子もなく工場の中へと入り、天井に取り付けられてある五つの監視カメラを眺める。

「今あのカメラに映ってんのはお前だけだよ」

「…あの二人相手を猫のように扱って、監視カメラも操作してただなんて

流石は”暴れ雲”あの頃と全然変わらないわね。でもちよつと残念オーラの量が増えたんじゃない？」

「やかましい！何が悲しくて久しぶりの再開をツツコミからはじめにやなんのだ！」

メガー又は静かに、懐かしむように言う。

その穏やかな表情からは敵意も、捕らえられていた面影も感じない。

「久しぶり。三年ぶり、かしら？」

「ああ、まーさかこんな形で会うことになるたアな。さ、話してもらおうか？」

ガジルはボロボロになった椅子に腰かけ、じつとメガー又を見る。

「ま、その前に俺の予想言わせて貰っても？
合ってたら今度なんか奢れよ」

「フッフ、相変わらずね。

若い頃を思い出すわ」

「ハッハッハ！冗談！俺もお前もまだ若いだろ」

腐敗した工場には似つかない豪快な笑い声が響く。

「…全部、自分でやったことなんだろ？」

勝手にお前の家に上がったが、この事件に実行犯はいない。

証拠を残さず、抵抗の後を残さず、侵入方法を悟られず、そーなりやオテアゲ。

決定打は癖だな。お前は出かけるときは何時も靴棚を揃える」

「……………」

「家にあつたアップルパイ、ありゃルーちゃんのだろ？一口も食つてなかったぜ。」

良い子に育つたなア、うちに来たときも心配心配って顔してたぜ」

「それでも、あの子は変わったわ」

「ああ、確か、お前の旦那さんが亡くなったときだな」

5年前、ルーテシアの父は交通事故で亡くなっている。

家族で旅行していたとき、赤信号のまま横断歩道を渡ったルーテシアを庇って。

「あの日以来、あの子は笑顔を見せなくなつたわ…」

「そこに現れたのが、あの人が面倒を見ている同い年くらいの子、アギト」

心を閉ざし、部屋に籠るようになったルーテシアを解き放つたのは、他でもない、アギトだ。

近所に同じ年の子はおらず、友達、と言ってもたまたま挨拶するだけの仲は手一つで数えられる程度。

「ええ、あの子が遊びに来るようになってからは、ルーテシアも元気になっていったわ」

「……話が逸れたな。」

お前が此処に來た理由は、何となくだが分かる」

ガジルは急に険しい表情を作り、落ちてきそうな電灯を睨みつける。

「……あの人に何かあったのか」

「……………」

目を伏せたメガーヌを見たガジルは、やはりな、と呟く。

「最初からおかしいと思っていた。何でわざわざ俺のここに来たのか。」

いや、何で最初にあの人の所に行かなかったのか。

お前を助けようとしていたルーちゃんを見つけたのはアギトだ。残念なことに俺はアギトに頼りない奴、と思われている。

じゃあ誰が頼りがいのある奴だ？ 答えは実に簡単、あの人だろ」

そう、アギトが足を運ぶのはルーテシアの記憶にあるガジルではなく、自身の世話をしてくれる方の方に足を運ぶだろう。

「じゃあ何故足を運ばなかったのか？

簡単に、あの人がいないから。」

今頃アギトは優しく抱きしめられて寝息を立てている頃だろうが、本来ならあの人の所にいるはずだ。

…調べてて分かった事だが、アギトの服にカメラが設置されていた」

「変態っ!?!」

「違う！いくら女と縁が無いからと言って恩人の娘に手エだすか！」

「それ以外ならOKなの！？」

「わーい俺のイメージ木っ端微塵」

そろそろ自身のイメージを変えなければマズイと確信したガジルは服装を整える。

「…犯人の要求は30億。」

しかーしこの30億は犯人から見たら残念賞のよーなもんだ」

服装を整えたガジルは古びたドアを蹴り破り、出口を確保する。

「どういうこと？」

「…管理局に事が知れた場合、お前の命は保障しない。

そして監視役としてアギトが着いて来て、俺の事務所には良く管理局さんが遊びに来る。

つーこたア、犯人の目的は初めから30億ではない」

「…まさか」

「そう、管理局だ。

管理局が手を出しているところをアギトに撮らせ、犯人側がそれを受け取り、電波妨害か何かでその映像を大きく放送、んでお前を殺す。まあ管理局のイメージダウンを狙ったわけだな。

アギトにやどーせ、撮れたらあの人を解放してやるとの条件をつけたんだろう。

…今回の一件、何やら大事らしいな。まっ、一言言ってやれるとし

たら残念だったなぐらいか」

遠くから微かに慌ただしい足音が聞こえる。

足音からして三人、そう判断したガジルはやれやれと疲れた表情を見せ立ち上がる。

「とりあえずお前はルーちゃんの所へ行つてやれ。

今回の事件の被害者はお前じゃなくてルーちゃんだ。
詳しい話は後でまた」

「…本当に隊長は無事なんでしょうね？

もし捕まっていたら、酷いわよ」

「なアに言つてやがる。

あの人がそう簡単に捕まる事なエだろ？」

「でもやっぱり」しつけエな！手エ引いてから一度も戦ったことね
エんだろーが、今のお前に出来ることは娘笑顔にしてやれることだけだろ」…ありがとう！」

メガー又はガジルに礼を言うと、振り返り指を鳴らす。

それと同時に現れたのは黒い影。人間の形をしているが明らかに人間とはかけ離れており、その闘志も並々ならぬものを感じる。

「お願いね、ガリユー」

ガリユーと呼ばれた黒い影は、その赤い眼でガジルを見つめた後、一礼をしメガー又を抱き上げると先ほどガジルが確保した出口から外へ出、昆虫のような翼で夜空を舞う。

「…しかしまあ、面倒くさくなりそうだな。
違法デバイスと言い今回の件と言い、探偵が首突っ込むことじゃねーんだがよ」

工場の閉ざされていた扉が爆音と共に破られる。

現れたのは、眼帯をした銀髪の少女と強い目をした赤髪の少女、そして同じく赤髪の巨大な盾のようなものを持った少女。

「チッ！遅かったか」

「そこのおっさんにはタツプリ落とし前つけて貰わねえと…！」

「うゝ！また怒られるッス…」

現れた三人の、いや後ろの扉からやってきた先ほどガジルが交戦した二人を合わせた五人の少女に向けてガジルは満面の笑みを浮かべた。

「フッフ… フウハハハハハハハハハハハッ！」

美少女美少女美少女美少女美少女オオ！前言撤回探偵だが何だか知らんがア！たまには大事にも顔を突っ込んでみるものだなア！」

圧倒的不利に置かされたこの状況でガジルはそれだけで工場が壊れそうなほど叫び散らし、両手を広げる。

「さア！折角大事に首を突っ込んだんだ！
俺を楽しませてみるオ！」

布団の中で、ルーテシアと共にシグナムに抱きしめられながら寝ているアギトは罪悪感を覚えていた。
父のような存在を助けるため、友人を騙し、優しく抱きしめてくれる人を騙し、未だ帰宅しない事務所の主を騙したことに。

「ごめんなさい……」

無意識に放たれた言葉と共に、大粒の涙を浮かべる。
すると、事務所の扉が強めだが丁寧に叩かれる。

それを聞いたアギトは二人を起こさないように素早く布団から抜け出し、玄関の鍵を開ける。

「えっ？」

アギトの目に飛び込んできたのは月明かりに照らされたルーテシアの母、メガーヌ。

どうして？とアギトは自分に問いかけながらメガーヌを驚きを隠しきれない顔で見つめる。

「なん……で？」

「変な探偵さんが助けてくれてね」

メガーヌはアギトの質問を笑顔で返すと、アギトの手を引き事務所の客間でシグナムと共に寝ているルーテシアのところまで行く。

「ルーテシア、ルーテシア」

メガーヌは愛しの娘の頬を優しく叩く。

するとルーテシアは重い瞼を開き、優しく微笑んでいるメガーヌを見つめる。

「…ママ？」

「うん」

ルーテシアはメガーヌの存在を再確認するとアギト同様大粒の涙を浮かべる。

「ママ…ママア！」

「うん！ごめんね心配かけて…」

跳ね起きたルーテシアは涙を流しながらメガーヌを抱きしめる。

メガーヌも目に涙を浮かべルーテシアを二度と離さぬよう強く抱きしめる。

「ママア……おじさんは？」

数分間抱き合ったルーテシアは、母を助け出してくれた探偵がいな
いことに気づく。

邪魔をしたら悪いと寝たふりをしていたシグナムも顔を上げメガー
ヌの反応を待つ。

「大丈夫、おじさんすぐ帰って来るから」

「…うん」

ルーテシアは半信半疑のまま頷く。

メガー又はルーテシアの頭を撫で回した後、アギトに向きを変える。

「貴女も私も、守りたい人のために動いただけなのよ。

それを責めることなんて誰も、神様にだって出来ないわ」

コクリと頷いたアギトはルーテシア同様強く抱きしめられた。

「娘を助けてくれてありがとう」

翌朝

シグナムの不安は大きくなるばかりであった。

理由はとても簡単、未だガジルが帰宅していないからである。

「フッフ、どうしたのシグナムさん？」

そんなシグナムを見たメガー又は微笑みながら話しかける。

「い、いえ…なにも…」

あんな残念でもこう帰ってこないと心配になってくるもの。

正直今すぐにでも探しに行きたいのだが、それだと残された三人に危険が襲い掛かるかもしれない。

「私達のことは大丈夫よ。
ガリユーもいることだし」

客間でルーテシアと戯れているガリユーに目を向ける。

「あの子は召喚獣っていつて、私達のことを守ってくれるの」

「ですが…」

「ほら、心配なんでしょ」

背中を押されたシグナムは頷き、急いで事務所の扉を開ける。

シグナムの目に飛び込んできたのは眩しい朝日、道を行く人々、事務所の扉の前で寝ているガジル。

その右手には酒瓶、左手には酒のおつまみ。

「…ん？アレ？何処だ此処？記憶喪失？いや此処は俺の事務所…あ、シグナムおはよう。」

良い朝だな。お前の下着もこの角度ならバッチリだ」

五分後

「おじさん！本当にありがとう！」

「おう！まあ困ったことがあったら俺のところ来いよ！」

ガジルは案の定ボコボコにされ、二人の親子を見送った後、事務所

の客間に戻りソファ―に座るシグナム二綺麗な土下座を見せる。

「…何か言うことはないか」

「いや、その、実はですね、メガ―又助けた後に五人ぐらいの美少女が俺に襲い掛かってきてですね、その子たちと遊んだ後にすごく上機嫌でして、ホームレスのおっさんと、酒をですね」

「何か言うことはないか」

「すみませんでした」

何故謝らなければならぬのかと心中疑問に思いながらも深く土下座をするガジル。

やっと許す気になったのか席を立ち、支度を始めたシグナム。
ガジルは頭を掻きながらソファ―に残されたアギトへと向きを変える。

「おっさん、全部分かってたんだよな」

「な―にがだ」

「旦那がいないことや、アタシが皆を騙してたこと」

「へえ、そうだったのか。」

酒のせいで記憶がないんだ」

「嘘ばっか」

「どうだったかな―…」

後、旦那とやらはどーやら俺の知り合いみたいでな、あの人が帰って来るまで俺がお前を引き取ることに荷した」

「「はあ!？」」

突然の告白にアギトとシグナムは大きな声を上げガジルに迫る。

「なんでアタシが変なおっさんの世話にならないといけないんだよ
!」

「この変態!そんなにも飢えていたのか…逮捕だ逮捕!／／／」

「原型止めてねーぞオイ、これは直しようがない。

ヘイヘイ決定決定。あの人が見つければ終わりなんだから我慢しろ、シグナムも妙に可愛がってたけど、こればかりは譲れんぞ」

ガジルはいつもの通りソファーに踏ん反り返り大人向けの本を見る。

「ダメと言ったらダメだ!

こんな変態と一緒に生活させたらアギトが変になる!」

「そうだそうだ!」

ガジルはワーワー文句を言う二人に呆れ、止めを刺す。

「報酬」

「え?」

「だから依頼の報酬。ルーちゃんどっか行っただしお前が払え。

結構しんどい依頼だったから高いぞ。

まさか無いと？おいおい、シグナムに頼ろうったってそーはいかんぜ。

なにせソイツも金ないから、ちなみにうちでは金払えなかったら代わりに家の家事洗濯を任せてるんだ。はいコレでお分かりレディース。後サービス期限終了したから」

有無を言わせず相手の手を全て叩き落したガジルは再び雑誌に目を通す。

アギトも流石に言い返せなくなったのか悔しそうにガジルのスネを殴りつける。

そんな中、シグナムは意を決したかのように目を見開き宣言する。

「ならば私も此処に住む！／／／

アギトが変な影響を受けないようにしっかりと見てやる！／／／」

「……はやてちゃんカワイソー」

「貴様アアアアアア！それは卑怯だぞオオオオオオ！」

必殺技の前に手も足も出なくなったシグナムは何故か涙を浮かべながら事務所を慌しく後にした。

アギトその後姿に手を振った後、ガジルの腹の上に座る。

「…よろしく」

「おう」

この事件が、管理局を大きく変えることを、
そしてガジルの運命を変えることを誰も知らなかった

依頼 No. 3 酔っ払ったまま玄関で寝るな（後書き）

???「あのおっさん！許さねえ！」

???「でもあの人、少し優しくかった」

???「えゝそうっすか？ただのスケベ親父にしか見えなかったっす」

???「かなりのやり手だったな…私達がこつもあつさり、近くにあつた養豚所の藁の中に放り込まれるとは」

???「ああ…屈辱の極みだ…」

依頼No. X パーティーには一人魔法使いを（前書き）

今回は記念話ということで番外編です

なんだか最近体が重くて仕方がありません…病院に行った方がいいのか…

それと酷くどうでもいいのですが、仕事帰り小学生に足踏まれしました

依頼 No. X パーティーには一人魔法使いを

夏。此処アルタレッタ事務所の事務所に二人の女性がいる。

一人はアイスを食べ、一人は事務所の主が買ってきてくれた料理の本を黙々と読んでいる。

どちらとも額に汗を浮かべ、事務所の主を待つ。

ゴミを捨てに行くと言ってからかれこれ20分。

始めは二人で会話をしていたのだが、聞こえてくるセミの鳴き声と部屋を涼しくするただ一つの道具、扇風機の音だけが響いていた。

「たっだいまー」

「「遅い」」

二人は事務所の主、ガジル・アルタレッタにピシャリと告げ、立ち上がる。

「すまんア、新作が出たもんで」

新作？と眉間に皺を寄せガジルを睨む女性、シグナムはどうせ趣味の悪い大人向けの雑誌でも買ってきたのだろうとガジルの手にある物に目を移す。

「…これは」

シグナムは本に見覚えがあった。

そう、確か今読んでいる料理の本の続編のようなものだ。

「…あまり俺をミクビルナヨ」

ガジルはため息つきながら料理の本を本棚へ。

もしかしたら自分のために買ってきてくれたのではないか、という考えがよぎるも、この男にそんなことが出来るのか？という考えに押しつぶされる。

「そんなことより行こーよー」

少し残念そうな色を見せるシグナムの服を、タンクトップを着た少女、アギトが引つ張る。

「あ、ああ、すまない。」

ガジル、用意は出来たか？」

「ん？おう」

38 を越える猛暑、いやもつと暑くなるであろう日にガジルは黒のロングコートを羽織り、いつものように大人向けの雑誌を片手にやってくる。一体何処へ向かおうとしているのか…
信じられないが彼曰く、別に暑くない、とのこと。

「…ならば行くか」

「ふう……」

ガジルの視界に広がるのは青く輝く海、そう、ガジルたちは今海に
来ているのだ。

此処に来た理由は一つ、またもや管理局、もといシグナムに依頼さ
れたからだ。

内容は、あまりの暑さに仕事が進まない機動六課、その部隊長が打
開策として海へ行こうと提案。結果、機動六課全員で海に行くこと
になった。

ガジルの仕事は、美人揃いの機動六課の女性の面々がチャラチャラ
した男にナンパされずに今日一日を楽しく過ごさせる。

つまり、ナンパしてくる奴等を寄せ付けないようにすることだ。

「お勤めご苦労様です、先輩」

「……だァーれだ、てめえ」

「相変わらず凄いですね……」

此処に着くまで五回のナンパにあったのに、全部一瞬で追い返すな
んて」

そう、此処に来るまで五回の襲撃にあったのだ。

皆考えている事は同じで、折角海に来たんだから彼女作ろうぜ、の
ような考えを持つ男が多すぎた。
これもこの暑さのせいだろうか。

「少し睨んでやったただけだ」

「その格好で睨まれたら……」

「アギトが行きたい行きたいと駄々を捏ねて、仕方なく受けたただけだ。」

海で遊ぼうなんて考え、俺にゃない」

サングラスに黒のロングコート、Yシャツに黒のジーンズ、ビーチサンダルを履いているとは言え、明らかに海とはかけ離れた服装。それらの上からも分かる筋骨隆々な肉体。

「ケツ、何とでも言いやがれ。」

そら、妹さんが来たぞシスコン。さーっさと行け」

「だからシスコンじゃないと「兄さん！」…失礼します」

満面の笑みを浮かべながら走り去るティータを横目で見ながら、コイツ本物なんじゃないかと思うこの頃。

ティアナが来たということは女性陣が来たということで、ここからが本番。

「いやー！海やなあ！」

「うん！日焼け止め塗らないと」

「あ、私も」

和気藹々と楽しむ機動六課各分隊隊長、そして部隊長。三人ともルックス、顔、どれも飢えた男を誘う。

「管理局の三羽鳥か」

やれやれ、あの娘達をげっちゅうしようとする輩は多そうだ」

微かな、けれど強い雰囲気が浜辺に群がる男全員に広がる。
ナンパ師の全員が、彼女達にターゲットを変更した気迫にも似た覚悟。

「ほう、その彼女を求める気迫、ナンパ野郎だろうが俺は敬意を払うぞ」

ガジルが三人の下に行こうとしたとき、ナンパ師の三人が動いた。一人はビーチバレーのボールをわざと弾き、一人はペットボトルの空を、そして一人は正面から堂々と。三人は目も合わせずに、互いのターゲットを確認して歩みを進める。

三羽鳥の位置も多少バラけたタイミングを狙い、ナンパ師は動く。

「やるではないか。

貴様等の魂、確かにダイヤモンド以上の輝きを発している。

しかしだなア……」

まるで某世紀末救世主伝説の無○転生を使用したかのような動きでガジルはナンパ師の下に向かう。

転がってくるバレーボールをフェイトより先にキャッチし、ペットボトルを持った男がなのはにぶつかる前にぶつかり、手に持ったペットボトルを弾き、ダストシュート。

「その子のお嬢さん。
帽子落しましたよ」

そしてすれ違い様にはやてから盗んだ麦藁帽を最後の一体がはやてに接触する前に、渡す。

三人の動きを完全に封じた。動けない。絶世の美女、話したくとも話せない。

「あ、おおきに。

なのはちゃん！フェイトちゃん！はよー！」

「待ってよはやてちゃん！」

「あ、置いてかないでー！」

和気藹々と去っていく三人を微笑みながら見守るガジル。

その後ろでは敗北したナンパ師の三人がガジルを睨みつけていた。

「…俺の知人に、こんな奴がいた。

俺が言うのもなんだが、大してモテもしない野郎。

だが奴のナンパ成功率は99%。失敗したケースなど一度しかない。考えず、ただ直感だけでナンパをする。…奴が失敗したナンパは…

…初めてのナンパ相手、同級生だ」

「同級生………だと…？」

「馬鹿な！アンタの話からじゃソイツァ顔は良くなくても良い感じの奴なんだろ！？」

「この阿呆が。初めてのナンパ相手だ。

普段とは違う自分の姿を見せ、失敗した……

つまり、ナンパとは仮の顔でやるのではなく、本当の顔で行うもの！

ま、俺は成功した記憶が無いんだが、な。ちなみにソイツァその同級生と結婚した。

頑張れよ少年たち！持ち味をイカセッ」

なんとなーくだが哀愁が漂うガジルの背中。

きつとナンパには良い記憶が無いのだろう。

そんなガジルに対し少年達が無意識に行った行為は、敬礼であった。

「ねえシグナム」

「なんだ、アギト」

機動六課の面々が集い、海の家なところでカキ氷や焼きソバを食している中、可愛らしい水着を着たアギトが、いつもどおり髪を束ね、やや大きめの羽織で肌を隠しているシグナムに話しかける。

「今日のおっさん、なんか変なんだよなあ…」。

アタシの我が侘素直に聞いてくれたし、真っ先にナンパしに行きそうなのになんと仕事してるし…」

「そういえば…」

シグナムは海の家の前で腰を下ろし、大人向けの雑誌を黙々と読み続けるガジルを見る。

「シグナム？なんかあんのか？」

ガジルを眺めるシグナムの隣に、オレンジ色の髪を三つ網にした少女、ヴィータが腰を下ろす。

ヴィータもはやてを守る騎士で、シグナムとは長年の付き合いだ。

「いや…ガジルの様子が妙だというか…」

「ガジル？ああ、あの黒い奴？
何だよいつもと違うのか？」

「ああ、今日は普通過ぎる」

人前で堂々とエロ本読むのが普通？とヴィータはガジルの品性を疑う。

「あ、入ってきた」

読み終えたのか、大人向けの雑誌を腰に挿み、海の家に入ってくるガジル。

行き先は受付、何か食べるのだろう。

「カキ氷と…それから焼きソバを」

注文したのはカキ氷と焼きソバ。
その二つを持って今シグナムたちが食べているテーブルに。

「よーアギト。楽しんでるか」

「うん！ありがとうおっさん！」

「そうか…ありがとなシグナム。
アギトの面倒見てくれてよ」

「あ、ああ…」

いつもと違うガジルをシグナムは疑問に思っても箸を進めるシグナム。そんな中置いてけぼりをくらっているヴィータに気づくガジル。

「おつと失礼、お嬢さん。」

俺は雇われた探偵、お嬢さんは？」

「…ヴィータ」

「ヴィータちゃんか、お勤めご苦労様」

短く返事をし、ヴィータはシグナム同様、疑問を抱きながら箸を進める。

「あのー」

「ん？」

四人で不思議な雰囲気漂わせながら箸を進める中、ガジルは誰かに呼ばれた。

振り向くとそこには水着姿のはやてが立っていた。

「えつと…君は確か…そうだ、機動六課部隊長八神はやてちゃん。だったか」

「あ、どーも先ほどは。」

それと名前、覚えといってもらえて」

「いやいや、レディーの名前を覚えることなど、朝飯前のオヤスミ

ナサイよ」

「ふふふ、面白い人だな。

シグナムが氣に入るわけや」

「あ、主はやて！？／／／」

突然の発言にシグナムは驚き、思わず焼きソバを落としてしまう。勘が鋭い彼女にしては珍しく気がつかない。それを見たガジルは食べかけの焼きソバをそつとシグナムの前へ置き、時計を眺める。

「うちのシグナムがお世話になってます。

ご迷惑かけてないか？シグナム？」

「ハッハッハッ、いやーシグナムには料理とかして貰ってますんでアギトも喜んでくれますし、うちに貰いたいくらいですよ」

「が、がじるっ！！？／／／／／」

顔から火が噴きそうなほど真っ赤になったシグナムは何も出来ずに、震える指先で箸を握った。

そしてやっと気づいたのか、地面にこぼれた焼そばを発見する。

「あ、俺ちよいと席外すからよ、あんま迷惑かけんなよアギト」

言葉を発しようとしたシグナムだが、もうスデにガジルの姿はなく、店を後にしていた。

花束を片手に、ガジルは墓の前に立っていた。

墓といっても、立派なものではなく、ただ石を積み重ねて作られた子供でも作れる墓。

「…久しぶり。なんとか元気でやってるよ」

彼にしては珍しく弱々しい声、少し幼げなのは気のせいではない。ガジルは微笑みながら花束をそつと墓の前に置く。

「最近賑やかになってきたんだ。
気になる女の子も出来たかな」

墓に向かって発するガジルの横顔はどこか悲しげで、昔を懐かしむような顔をしている。

それから目を伏せ、合掌。静かな森の中、そこから海が覗けることから、崖に近い場所であることがわかる。

臉の裏に映る風景。此处から眺める景色も年々変化している。

「俺もそろそろ、変わらにやなんのかねえ…」

それに応えるように、一陣の風がガジルの頬を撫で、線香の煙を流す。

見上げた空には一筋の飛行機雲が空を切るように走っていた。

「おっさん！」

浜辺に戻ると、アギトが元気良く腕を振りながらガジルの下へ走ってきた。

その手には捕まえてきたのかヤドカリが一匹。

「ほう、捕まえたのか？」

「うん！シグナムに泳ぎも教えてもらっただ！」

「よオかったじゃねーの。」

そのヤドカリは返してやりな、夜に仕事あつからまだオネムしてーようだぜ」

ヤドカリは照りつける日から身を守るようにして殻に籠っている。アギトはもったいなさそうに口を尖らせヤドカリを砂浜に放す。

「良い子だ」

「へへへ、じゃあシグナムの所戻るね！」

「おう」

「あ、忘れてた。おっさん、シグナムが具合でも悪いのかって言ってた」

「具合？いつもどおり良好だが？」

「ん、でもやっぱ今日のおっさん変だな」

それじゃ、と手を振り浜辺を走ってゆくアギト。

ガジルはそれを見守ると、今日一日、自分がとった行動を思い浮かべる。

「…心が出てたか…よし、騒ぐか」

自分の頬を三度叩き、サングラスを外し、深呼吸。

走ってゆくアギトを追い越さぬよう、軽く走り、アギトの後を追う。

「あれ？どうしたんだおっさん？」

「ふっ、折角海に来たんだ、久しぶりに女の子に話しかけるのも良しかな、と」

「…おっさん、自分の仕事分かってる？」

「理解しているとも、機動六課の女性方をナンパ戦士から守る事だろう？」

しかしだなア、誰も俺がナンパしてはいけないとも言っていない」

「屁理屈じゃん…」

「屁理屈ウ？ハッハッハッ！勉ー強が足りんようだなアアアギトオ！

ナンパ戦士から六課女性陣を守る！つまりだア、俺と言う存在そのものがナンパと言うモノに変わり彼女達を守り抜く！毒をもって毒

を制す！ナンパをもってナンパを制す！男が男である限りイ…ナンパと言う不変の法則から抜け出す事は出来んのだア！それが例え神であつたとしてもーッ！」

砂浜の真ん中で10歳そこらの少女に何かを熱く語っている黒い男はまさに変人といつても良いだろう。

アギトは溜め息を吐きながら10mほど離れた距離からジトつとした目でガジルを眺めるシグナムの下へ行く。

「シグナム、おっさん逮捕されるだろ？」

「間違いないな」

「ナンパッ！成功ッ！デートッ！つまり結論ッ！夏男の世界が発生しそこに…あれ？」

やっと自分が何をしているのかを理解したガジルは咳払いを一つし、何事も無かったかのように二人の所へと足を進める。

「…ナンパしても良い？」

「「仕事しろ」」

それから数時間、ガジルは仕事をしながらも二人の相手をした。

辺りは茜色に染まり、青く輝いていた海はまるで燃えているかのよう
に赤く染まっていた。

海へ訪れていた客はほとんど帰ってしまい、人氣が無いに等しい。

ガジルは一度目を伏せ、赤く染まった海を睨みつける。

「……………」

ガジルの脳裏を横切るのは、家を包む灼熱の炎。降り注ぐ血液。踊
り狂う断末魔。

幼かったガジルには、あまりにも過酷過ぎた運命。

「ガジル？」

「…シグナムか」

凜とした声に振り向くと、そこには昼間と姿が変わらないシグナム
が立っていた。

その表情から、少々遊び過ぎたという思いが伝わってくる。

「どうした？そんなに殺氣立って」

「いつもの通り、クールでナイスガイな俺のはずだが」

「…嘘がヘタだな」

「嘘には定評があったようななかったような」

「何かあったのか？」

ガジルの頬が一瞬強張る。
心配そうなシグナムの顔、罪悪感を覚えながら上手く誤魔化そうと
言葉を発するガジル。

「…さアな、お前が水着見せてくれれば思い出すか…も？」

ガジルの目が大きく見開かれ、その視線は目の前にいるシグナムへと
全て注がれる。
解かれた後ろで束ねられた髪は潮風に揺れ、肌を隠していた上着は
ハラリと地面に落ちる。

「…早く言え……／＼／」

豊満な胸を隠す黒のビキニ、スラリとし引き締まったボディーライ
ン。

人生至上初の出来事にガジルは呆気に取られていた。

「あ、あまり見るな……／＼／」

頬が赤く見えるのは夕焼けの影響だけではないだろう。
やっと正気を取り戻したガジルは一度唾を飲み込み、シグナムから
視線を逸らす。

「え、あ、あーと…そのアレだよー…アレ」

このような急速な事態に滅法弱いガジル。
あの天下の大通りでエロ本を堂々と読んでいる姿は一体何処へ消え
うせたのだろう。

「じ、実家に帰ったんだよ」

「は？どういうことだ？」

「い、いいいいいや、こつちの話：ハ、ハハ：

（ヘタレ過ぎるだろ俺イ！なんだよ！これじゃあ残念を認めざるを得ないじゃねーか！）」

状況が状況で無ければこの場を去っていたが、アギトと遊んでいるときも肌を晒さなかったシグナムが少しでもガジルの心の支えになるうと恥ずかしいのを我慢して肌を晒していると思うと逃げ出せない。

「ええい！ウジウジするな早く言え！」

業を煮やしたシグナムは裏返るような声でガジルに喝を入れる。

「じ、実は！」

「実は？」

「今日で、魔法使いにクラスチェンジしました…」

海に静寂が訪れる。

シグナムはもちろん、海も風も太陽も呆れたのか何も言わずにただ静寂が流れ去るのを待つ。

静寂を切り裂いたのは赤くなったガジル。

「だ、だってよ！俺今日で30歳を迎えるクセに、一回も！一回も女の子と【ヒューッ】もした事ねえし、キッスもした事ねえんだぞ！顔は結構イカしてる方だと言っのに、何だというのだこなクソオオオーーーーッ！」

一人涙目で夕日へ訴えかけるガジルに呆気を取られながら、そっと微笑むシグナム。

「チイイイクシヨオオオオオオオオオオオ！」

「ガジル、そこで止めておけ。
虚しくなってくるぞ……」

「分かってる！分かってますとも！だけどこんの胸の中のモヤモヤしたモンが一向に、一向に晴れねエ！まな板についたシッコイ油污れみたいな感じのッ！」

「なら、また買えばいいだろ」

シグナムの何気ない一言にガジルは叫びを止め、シグナムを見る。

「……それも、そうか……そうだよな！魔法使いになっても【ヒューッ】出来ないとは限らねえもんな！
よオし！今年中に彼女探すぞオオオオオオオ！」

また夕日に向かい叫び声を上げているガジルを見たシグナムは、ガジルに背を向け皆が待っているだろうバスへと足を進める。

「あ、シグナム」

「なんだ？」

「そのー……水、着……似合ってたぞ」

「あ……ありがとう……／＼／」

顔が熱くなってきたのが分かったシグナムは、ガジルに見られないように笑みを浮かべながら走り去っていった。それを見送ったガジルは、空を仰ぐ。

「少し、変わってみるか……」

ガジルの呟きは、再び吹き始めた潮風に飲み込まれていった。

依頼No. X パーティーには一人魔法使いを（後書き）

シグナム「」

はやて「やけにご機嫌やな」シグナム」

シグナム「はい。今日は特別」

はやて「水着新調したかいがあつたな」

シグナム「はい！……へ？あ、主ははやて？／＼／」

はやて「フッフ…主たるもの、従者の行動は把握せなな…」

依頼No.4 愛の魔法使い（前書き）

更新遅れてしまい申し訳ありません！

少し全身打ちついたり骨折したりで入院していました（おい

さて、今回はかなり探偵からかけ離れた内容となっています。

そのため二話に凝縮：出来ますかね：

それでは、どうぞ！

依頼 No. 4 愛の魔法使い

「おっさん！おっさん！」

「クッ！なんだアアギト！」

「早くしろよ！来たぞ！」

「このままでは…クッ！俺に構わず先に行けエエエ！」

ガジルの慟哭にも似た叫びと共にWCと書かれたドアの奥から卑猥かつ下品な音が聞こえてくる。

アギトはその音をかなーり不快に思いながらもドアをノックする。

「早くしろよおっさん！お客さん帰っちゃうだろ！」

「うう…半ケツ＋汚物が付着した状態でこの俺にお客の接客をしろと言うのか…そんなこと地獄の閻魔様でもせんわ…この鬼娘エ…」

ご察しのとおり、この残念、下痢である。

それも客が来たというタイミングで胃袋に設置された爆弾が爆発した。

アギトにはまだ接客は早いと思いながらも、涙目で体をくの字に曲げているガジル。

「あの…大丈夫ですか？」

そんな二人に、聞き覚えのある女性の声が響く。

「え？もしかしてお客さん？それも女性？
なんてこった！後十数秒待っててください！お願いします！」

ガジルの言葉から覚悟にも似たものを感じたアギトは客を客間へと連れて行く。

客を座らせ、いつもガジルがしていることをしようとしているアギトの耳に強烈に卑猥な音とガジルの慟哭が響く。

「あの…大丈夫なの？」

「……すみません」

気まずい沈黙が流れる。

何秒か経った後、WCのドアが開かれ、その奥からケツを押さえながら客間へ歩いてくるガジル。

目が虚ろであった。よほど壮絶なデュエルが行われていたのだろう。

「おっさん大丈夫？」

「いや…その…下品なんですけど、ね…フルパワーで押し出した瞬間、毛も巻き込まれちゃってね…その、ナンカね、開始早々これはないよな…」

若干目が赤くなっているのは気のせいにしておこつ。

ガジルはアギトに礼を言い、客の顔を見る。

「…あれ？」

来客用のソファアに座っている栗色のサイドテールの女性にガジルは見覚えがあった。

ガジルが対ナンパ用戦士として雇われたときに出会った女性。

「おや、確か……エースオブエース、高町なのはさん、だったか」

「名前覚えててくれたんですか？」

「ふっ、俺はこーゆー記憶力は達者なんでね」

ガジルは誇らしげに言っているようだが、傍から見ているアギトから見ればかなり格好が悪い。

そんな二人の表情に苦笑いをするなのは。

「で、そのエースオブエースさんがどーして此処に？」

ま、私服で着てるって事は、俺に告白か依頼の二つだと思うが」

「後者です」

「それは残念だ」

当たり前のように答えたなのはの前にアギトが淹れたての珈琲を置く。

「それで、内容は」

「実は……」

「ふむ、良い味だな」

ガジルは完璧に季節外れの黒いコートを羽織り、目の前に置かれたケーキの味を堪能する。

今ガジルが居るのは翠屋という喫茶店。

一昔前、此処がどこかの雑誌に載っていたことを思い出したガジルは店内を見渡す。

「眺めも最高ときたか」

店内の大半を占めるのは女性の方々。

野朗も彼女と来店している者がほとんどである。

「どう思うよ、青年」

ガジルは自分の隣に座る男に言う。

長い髪を後ろで軽く束ね、少女のような顔つきを持った男 ユーノに語りかける。

「はぁ…そう言われましても」

ユーノはガジルの質問に答える気が出ない。

原因はユーノの目と鼻の先、カウンターに座る二人をジトつとした目で見つめるのがいたからだ。

今回、ガジルの元にやってきた依頼は、ユーノをなのはの父に認めさせることだ。

ズバッ、と言うと、結婚を認めさせて欲しいという内容だ。

内容からユーノとなのはが交際をしていることが分かる。

人の恋路にあまり興味の無いガジルはユーノとなのはの反応に微笑を浮かべる。

「しかし、生憎と俺は魔法使いだ。

色恋沙汰に縁も何も無い男だぞ？あまり良いサポートは出来んと思うが……」

「魔法使い？」

「あ、いや……忘れてくれ……」

ガジルは疑問に思っていた。

何故自分なのか？

いや確かにこれも全うな依頼だろう。

しかし色恋沙汰、しかも結婚が関わっている重要な男女の関係に残念極まりない魔法使いが何を出来る？

むしろ俺をサポートしてくれ。

と目で先ほどまで訴えていたが、今になってやっと理由が分かった。

「なんだ…また来たのか」

「お義兄さん……」

店の奥からやってきたのは高町なのはの実の兄、高町恭也。彼の立ち振る舞いを見たガジルは目を細める。

「中々イイ味だ…」

今度はこのアルプスブラックパフェを注文する」

「通ですね」

「いんや、こーゆー店に入るのは10年ぶりだ」

懐かしむ顔を浮かべるガジルを背に恭也は店の奥へと入っていった。そのやり取りを横で見ていたユーノは大きな溜め息をつき、ガジルに語りかける。

「…僕、恭也さんに嫌われてるんです…」

「ンなことだろーと思ったぞ青年。」

しかし…あの身のこなし、ただの民間人のモノじゃねーな」

「……………」

ガジルの言葉に押し黙る二人。

「そう緊張しなさんな。」

昔の俺ならどーしてたかは分らんが、今は深く追わん。

しかし、あア殺気立てて歩かれたら客も困るだろうに」

店内をもう一度見渡す。

先ほど見渡したときは賑わっていた店内も、恭也の出現により先ほどと比べどこかヒツソリとしている。

ガジルはヤレヤレと首を振り、なのはに語りかける。

「で、何で俺に依頼したんだ？」

恋愛沙汰なら俺より中学生の方が詳しいだろうに」

なのははガジルを見つめ、視線をユーノに移す。

ユーノもなのはと目を合わせる。

「実は、私の家、少し特殊なんです」

「特殊？」

さっきの兄ちゃんみたく、全員武術を習得してるとか？」

「はい。特にお父さんとお兄ちゃんが使い手で……」

なのはは辛そうに目を伏せる。

そんななのはをユーノは心配そうに見つめ、意を決めたかのように目を見開く。

「ガジルさん！」

「何だ青年」

「僕を鍛えてください！」

「何があつた……」

事務所の客間の入り口に立ったシグナムは目の前の光景に絶句していた。

妙にムワツとした空気、鼻を突く汗の香り。

「せ、先生！もう限界です！」

「限界なら死んでいる。後100回」

「は、はいイイイ！」

シグナムの目に映っているのは、客までダンベルを持ち上げているコーノと、それに呆れた目を向けているアギト、ソファアで大人向けの雑誌を読んでいるガジル。

「……ガジル」

「なんだね？」

「何だコレは」

「さあ？」

事の発端であろうガジルに詰め寄ったが、彼は大人向けの雑誌に集中しているのか適当に答える。

拳骨を一つ入れた後、この事務所の唯一の癒しであるアギトへ向かう。

「アギト」

「シグナム……」

「……何があつたんだ」

「良く分かんない。」

お客が来て、おっさんが出て行つて、帰ってきたと思ったらあのメガネとダンベルを持ったおっさんがやってきて……」

アギトにも分からないらしい。

依頼をされたということは、何かしら理由があるのだろう。

そう解釈したシグナムは大人向けの雑誌を読んでいるガジルの手からそれを奪う。

「どーしたシグナム。」

人んちの家宝奪うとは、逮捕ものだぞ」

「……コレのどこが家宝だ」

シグナムは手に持った大人向けの雑誌に目を向け言う。

表紙を見たシグナムはやや頬を染める。

「定価3980円。」

コイツはネットで買ったものではなく、自らの足で歩き、手に入れた代物だ。

豪華付録アアード袋とじ、袋とじには夢とロマンが120%詰まっている。

付録のDVDも素晴らしい出来だ。ちなみに俺は袋とじを開けない派だ。見えるか見えないか、チラリズムが俺を襲う。コンビニとか電車とかで必死に袋とじを開かないように中を拝もうとしている者見たいのなら買え、そう思うもつい応援してしまう。お前はどうか

「？」

「女の私に聞くな…燃やすぞ」

「普通にカンベンしてください。
で、どうしたよ」

「アレはどういうことだ」

シグナムは必死にダンベルを上げているユーノを指差す。

「依頼だ」

「………どういう依頼だ」

「アイツを鍛えろ、以上。
どうもモヤシっ子らしいんでな。
まずは屈強な肉体を作って貰わねば」

明らかに体が作られる前に壊れそうな鍛え方。
やらせる方もやらせる方だが、それをやる方もやる方だ。

「おいコラ青年。
今合計何回だ？」

「さ、328回ですウウ！」

「正確には329回だ。
喜べ青年、女神様が来たことにより今からお前に休憩の時間を与える。」

風呂は沸かしてあるな、アギト」

「うん」

「よし、今から3時間、体を休めろ」

「は、はい…」

ユ一ノは力が抜けたのか、ゆっくりとダンベルを下ろし、ユラユラと揺れながら風呂場へ向かう。
心配になったのか、アギトがその後に付いていく。

それを見送ったシグナムはダンベルに目を移し、ダンベルを持ち上げようと力を入れる。

「む？」

持ち上がらない。

大きさはさほどのものではない。

しかし市販されている物とは比べ物にならないほどの重量。

「何kgあるんだ」

「軽く30」

ガジルは立ち上がり、シグナムの隣に立つ。

そのままシグナムの左手に握られていた家宝と買い物袋を取り、台所へ向かう。

「う…！やっとな持ち上がった…」

「なアーにしてんだ、ほら早く下準備」

「あ、ああ」

此処へ来た本来の目的を思い出したシグナムは、ダンベルを下ろし台所へと足を進める。

食材を袋から出し、テーブルに置いたガジルはシグナムとすれ違ふように台所を出、ダンベルへと足を進める。

そのまま床に転がっているダンベルをつま先で蹴り上げ、それをキヤツチする。

「ふむ、重さを増やした方が良いか…」

本来ならジツクリと鍛え上げたいところだが、時間が無い。ユーノを鍛えられる期間は僅か三日。

「ククク、まさに付け焼刃だな」

何故三日か、それは三日後が決闘の日であるからだ。

「義兄と結婚を賭け決闘か…」

そう、対戦相手はなのはの兄、高町恭也。

相手は武術を習得しているかなりのやり手、勝てば結婚負ければ別れる。

それが決闘の内容。

ガジルは頭をダンベルで掻き、部屋の奥へと足を進めた。

依頼 No. 4 愛の魔法使い（後書き）

残念「…アレ？俺、探偵じゃなくね？」

アギト「今頃気づいた…」

依頼No.4 花にはモヤシ、鼻には炭酸飲料（前書き）

更新が遅れました！

折れた腕も順調に回復するなか、この季節の移り変わりの激しさときたらもう…

失われていた意欲も漸く回復し、依頼NO.4解決です。

しかし、考えてみたら残念さん探偵じゃなくネ？……まあ、この回は伏線、ということだ…

それでは、駄文ですがどうぞ！

依頼 No. 4 花にはモヤシ、鼻には炭酸飲料

「お兄ちゃん…」

高町家の道場で座禅を組んでいる恭也になのはが話しかける。

「何だ」

「無茶だよ…こんな事」

「腕の立つ男を雇ったんじゃないのか」

「でも…」

「何も出来なければ、所詮それだけの男だったという事だ」

「……………」

なのはは一人座禅を組む恭也を背に道場を去った。

決闘まで後数時間、今頃全力で稽古に取り組むユーノの事だけが心配だった。

「おい、起きろ青年」

「ううーん…もう食べれないよ」

「生意気な、後三秒で起きなかつたら起こさんからな」

客間のソファアで大きな鼾をかきながらだらしなく眠っているユーノの傍に立つガジル。

先ほどの一言から時計の針が三回動いた途端に、ガジルは台所へ向かい朝飯の準備をする。

「おっさん…起こさなくていいのかよ…」

ユーノのやけに大人クサイ鼾から台所へ非難していたアギトは、台所に現れたガジルに言う。

そう、後数時間で決闘が始まる。

「良いんだよ。動いた後は休む。どんな状況だろうがコレを忘れたらダメだぞ」

「間に合わなかつたら元も子もないじゃん」

「確かにそうだ。しかし奴は決闘があるにも関わらず目覚ましをセットしていない。」

つまりどーゆーことが分かるか？」

「……目覚ましセットするの忘れた」

「いいや違うね。青年はまだギリギリまで寝ていたいんだ」

「ごめん、それおっさんだけだと思う」

「良くあるだろう？ 学校とか行くときに、ちよつと早く起きたから二度寝していき、という思考。その後は時間との勝負だ。勝てばセーフ、負ければお仕置き。それも勝負は紙一重で決まる。どうだ？ ソクゾク心の底から闘争心が溢れて…」

ブツブツと呟きながら朝食を作るガジルを見ながら、やっぱり変な奴だと再認識するアギトであった。

流石にこのままではダメだと思ったアギトは、朝食を作っているガジルの代わりにユーノを起こそうとソファーに近づく。

「おーい、起きろ」

「…あ、や！ そこはダメだよ…！ 嫌じゃないけど」

「聞いていて腹が立つな。アギト、鼻を摘まめ」

こーゆー寝言にはやけに敏感なガジルは不快感を覚えたのか、アギトに起こし方を教える。

珍しくガジルと同じ事を思っていたアギトは、戸惑う事無くユーノの鼻を思いつきり摘まむ。

「ッ！ い、痛い！」

「お前の寝言で俺の胸が痛くなった。ほら、さっさと食え」

「あ、はい…」

ガジルはやはり不機嫌なままユーノの前に朝食を置く。

まだ覚醒していない頭でガジルの作った朝食を食べる。

「あの……先生」

「何だね青年」

朝食を食べているユーノが唐突にガジルに質問する。

「僕、勝てますかね…」

「分からん」

ピシヤリと答えるガジル。

余りにも無責任な答えであつたが、ユーノは表情は静かだった。

「俺はその兄貴の実力を知らないんだ。まあ立ち振る舞いからしてかなりのものだとは考えられるが」

「はい。とても強いです。多分、先生より」

「マジで？ まあ何にせよ、最初から諦めムード解放させてりゃ勝てるもんも勝てんよ。というか、聞くのが随分遅くなっちまったが、三日後に決闘だなんて鬼畜じゃね？」

「…何でも、店が休みの日に早く終わらせよう、だそうです」

「なるへそ、わざわざ相手の都合に合わせる必要はないということか…良い心がけだな」

ご馳走様でした、と手を合わせたユーノは立ち上がり事務所を出る

仕度をする。

ガジルは黙って空になった皿を台所まで運ぶ。

「あ、そうだ青年」

「はい」

「勝負に勝つ者は強い者じゃない。勝負に負けるのが弱い者じゃない。勝負に勝った奴が強いんだ。勝負に負けた奴が弱いんだ。だから、お前と兄貴はまだ対等なんだよ。自信持って頑張りな」

「……………」

「まつ、まずは兄貴に勝つ前に時間に勝たなきゃな」

「へ？」

ユーノは客間に備え付けられている時計に視線を移す。

時刻は決闘開始前の二十五分前。此处から翠屋まで走って二十分。

現状を理解したユーノは青ざめた顔で事務所を飛び出していった。

事務所を一目散に駆けていくユーノを台所の窓から眺めているガジルは微笑を浮かべる。

「頑張れよ青年、三日見てきたが、俺のシゴキに耐えた青年の根性
は中々のモンだ」

「おっさんは行かないの？」

「ん？ 馬鹿を言うな。今日は依頼が来なければ、友人から借りてきた仮面○イダーク○ガを今日一日で全話鑑賞するという任務がだな」

「人でなし」

「半分ジョークだ。今日は少し調べモンさ。家を空けるから、留守番は頼んだぞ。後でシグナムが来るらしいから面倒見てもらえ」

そう言うと、ガジルはお気に入りの大人向けの雑誌を手に取り、事務所を出た。

「お、遅れました！」

ユーノは息を切らしながら高町家の道場へ上がる。

道場には心配そうにユーノを見つめるのはと、無言のまま、ユーノに背を向け正座を組んでいる恭也。

ユーノは違和感を覚えながら一礼をして恭也の後ろに立つ。決闘開始まで、後一分。

「おはようございます」

「おはよう。…決闘の内容は覚えているな？」

「はい。どちらかが気を失うまで勝負を続行する」

「そうだ。……もう時刻だ」

恭也がそう言うと、なのはの傍らに置いてあった目覚ましが道場に響く。

向きをユーノへ変えようとした恭也の頭部に、衝撃と鈍痛が走った。

「っ！」

何事かと衝撃を、その細い腕で与えたユーノを睨みつける。
その細い腕は振るえ。殴った拳が赤くなっている。

「決闘は、もう始まっています！」

思い切り張った声が震えた。

それだけ思い切った行動だったのだろう。

ガジルがともに教えてくれた先制攻撃。決闘時間になった瞬間相手を殴りつける。悪く言えば不意打ちだ。

この手のやり方にはユーノは否定的であったが、この勝負だけはどうしても勝たなければならない。

「やってくれる……！」

「コレです」

「サンキュー」

とある大型ネット喫茶。

そこのある部屋に二人の男が同席していた。

一人は部屋中に残念オーラを撒き散らしている男、ガジル・アルタレッタ。

一人は先ほどまで妹と戯れていた男、ティード・ランスター。

「しかし、珍しいですね先輩が自分から僕に近づくなんて」

「んー、ちよいと気になることがあってな」

「管理局のデータを使って調べるものですか？」

「いやなに、こっちの方が手っ取り早いだけさ」

ガジルはティードから受け取ったデータをネット喫茶に送り、手馴れた動きでデータをチェックする。

その顔からは先ほどまで机の上に置かれた大人向けの雑誌を読みふけていた色は消えうせていた。

ティードがガジルに渡した物には、管理局の履歴のようなものが詰まっている。

勿論、管理局の人間がこのデータを持ち出すことは禁止されている。

「……………」

作業を進めていたガジルは、ある一件の事件を見て急に動きを止めた。

ティーダは横からその事件の内容を見る。

「殺人集団による殺人事件……コレって確か……」

「……ああ、俺が炭酸飲料飲めなかった時代で起きた事件だな」

ガジルは一泊置き、その事件の内容を詳しく調べ始める。

隣で作業を見ているティーダに、ガジルから何かが伝わってくる。必死に抑えているが、漏れ出す殺気と怒気。

声を掛けようにも、どう掛ければ良いかが分からない。

「……管理局は、コイツ等をまだ追っているのか？」

「……は、はい。一応僕も担当しております」

「ククク…違法デバイスと殺人集団とは…随分と偉くなったじゃねーか、ええ？ ティーダよ」

ガジルは不気味な笑みを浮かべ、事前に用意しておいたメモ用紙に何かを書き込んでいく。

その中身を覗こうとするが、案の定ガジルに止められてしまった。

「あの、先輩。一応、確認だけでも……」

「何だ、見てはいけないものでも入っていたか」

⌈
⋮
⌋

「安心しろ。不審なものは新作のエロゲのデータしか見当たらないぞ、このシスコン」

「ッ！？　だ、誰ですか四時間並んで買った新作のエロゲのデータを保存する不届き者は！！」

「落ちていて鏡三口」

隣で違う違う、と喚いているティードを他所に、ガジルは支度を始める。

「あ、ところでティーダ」

「僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない僕は悪くない」

「男の性だ、諦めろ。」

もし、もしだぞ？俺がティアナちゃんを嫁にしたら」

「ぶん殴ります」

「ほう……」

滅多に見ない自分に対する強気な態度に声を漏らすガジル。
付き合いは長いが、これほどまでに自分に強気な態度を見せたのは、
勝手にメロンパンを食ったとき依頼だ。
部屋の中にピリピリとした空気が流れる。

「フッ、安心しろ。どうせ俺なんかがプロポーズしたところで、誰も貰ってくれやしないさ」

ガジルのいつも通りの軽口に、ティータは冗談だと気づき目線を反らす。

どこかほっとしたような色を見せる顔色。良く見ると冷や汗までかいている。

「で、ですよー！ 昼間から大通りで十八禁な本を読んでる先輩なんか誰も貰ってなんか」

「馬鹿か。そうか馬鹿なんだなテメエは。前々から思ってたことだが、馬鹿だなテメエ。このイケメンで超が付くほど話題なガジル様が誰にも貰われない？ はっ、我ながらジョークが過ぎたぜ。で、なんだ？ その、明らかジョークやん！ ってツツコミが来るものをテメエはマジレスしやがって…」

「あ、はい……すみませんでした」

ティータは、本当に残念な男だなあ、と心の中で呟きながらデータを受け取り、立ち上がる。

長居は無用。早くデータを返さなければ勝手に外へ持ち出したことがバレてしまう。

「先輩…僕、そろそろ戻らないとマズインで…」

「おっ、すまん。助かったぞティータ」

「あー…真面目な質問なんですけど」

「なんだ？」

「管理局を遠ざけている先輩がどうして、管理局のデータなんかを……」

最もな質問である。

先程は巧く話を逸らしたガジルだが、ティードの立場と、その恩義に応えるべく、口を開いた。

「約束さ。ただの、男と男のな」

ガジルはニヒルな笑みを浮かべながら部屋を出て行く。

その顔にはどこか悲しみを押し殺したかのような決意が籠っていた。

「うわああ！」

ユーノは倒された体を無理やり横にズラす。

刹那、先程までユーノが転がっていた床には、凄まじい勢いで叩きつけられた恭也の足があった。

咄嗟に体をズラしていなければどうなっていただろうか？

考えるだけでもゾツとする。間違いなく気を失って戦闘不能。

地面に倒れていることに加え、先程から何度も恭也の打を受けている。

以前の自分ならもうとくに意識を手放しているところだっただろう。

（どうする…）

だが、結局は受けているだけ。

ユーノが加えた打はあの不意打ち一本。

ガジルには、頭を使えと言われていたが、何も思いつかない。

戦闘に馴れていないのか、視野はいつもより狭く、心に余裕が無い。

まるで追い詰められたドラ○もんが道具を探すかの如く作戦を練るユーノ。

ヒンヤリと冷たい床が熱くなった頭を冷やしてくれと同時に、今にも止めを刺してきそうな恭也が纏う威圧感をよりいっそう際立たせる。

（ポジティブだ…何事もポジティブに取り組むんだ…）

「お邪魔しまーす」

『！っ！』

限界まで引き伸ばされた緊張感が支配していた道場に、気の抜けた声が響く。

恭也はユーノに集中していたのか、道場に入ってきたガジルの存在に気づくのが遅れ、視線を一瞬ガジルに移す。

「しまっ
」

その一瞬のスキを見逃すか、とユーノは迫り来る恭也の足を払いのけ勢い良く立ち上がり、その勢いを殺さないまま恭也の顎に頭突きを入れる。

道場に鈍い音が響く。

それと同時に道場を再び支配する緊張感と静寂。

「…シスコンにしちゃ、愛する妹が何処のどこいかも知れねー野郎に奪われるのは納得いかんわな」

ガジルは目を見開くのはに軽くウインクして、手にぶら下げていた機械の部品が多く入った袋を道場の床に下ろす。

「モヤシはモヤシで固い所もある。特に頭…あれ、種だっけ？
……ま、一言、言ってみるとしたら。 残念だったな」

ガジルが道場の入り口の扉をピシャリと閉じた瞬間、仰け反っていた恭也の体がゆっくりと崩れた。

「ユーノくん……ユーノくん！」

何とか立っているが、今にも燃え尽きそうになっているユーノに、耐え切れなくなったのはが抱きつく。

なのはを支える事が出来ずに呆気なく押し倒されるユーノ。

そんな二人を羨ましそうに見つめるガジルは、道場に仰向けで倒れている恭也に近づく。

「いやぁー…、羨ましいなあ、妬ましいなあ。

彼女居ない暦〓年齢の俺には、この光景はこらえるなあ…いやマジで。

そつは思わないか？ お兄さんよ」

「……………全部、アンタの戦略どおりってことか」

ガジルの何気ない言葉に、気を失っているはずの恭也が応える。
その顔は負けたにも関わらず、どこか清々しい。

「はて、何のことやら」

「フツ、あの不意打ち、教えたのはアンタだろ？」

「効いたか？」

「まだまだだ…だが、奴には効果があった。不意打ちで緊張を覚えさせ、無駄に根性だけ鍛え上げ、長期戦に持ち込んだ。後は俺が奴に集中し、奴の頭が混乱しているときにアンタが気配を消して現れる。当然、奴に集中していた俺はアンタの存在に気づくのが遅れ、何者かと視線を移した……。俺しか見えて、感じていない奴にとつては絶好のチャンス。…そして弱点の顎に思い切り頭突き……コレを戦略と呼ばないでなんて言うんだ？」

「偶然。てかアンタ、結構余裕そうだな？」

「当たり前、前だ…」

まだ揺れる頭を押さえながら上半身だけを起こし、道場でイチヤツく二人を眺める。

「まあ、アンタの戦略つてのがそうだとしたら、一つだけ誤りがあるぜ」

「……なんだ？」

「根性は無駄に鍛え続けなきゃいけないことだってことさ」

「…ガジル、どういう事だ」

「何がだ？」

客間で筋トレするモヤシがいなくなってから二日が過ぎた。
少し前までは汗臭かった客間も、ファ○リーズの力により元の香りを取り戻し、汗臭の根源も事務所から消えた。

そんな事務所に、苛立ちを覚えながら、ソファ―に踏ん反り大人向けの雑誌を読みふけているガジルの前に仁王立ちするシグナム。
見るからに不機嫌。雑誌を読んでいるガジルも、やや不機嫌な様子。

「私の出番が、ない！」

「今のお前はどう説明する。イケメンな男と会話しているというシ
ュチュエーションを貰っておきながら出番が無いとは…つくづくだ

な」

「だ・ま・れ」

シグナムは青筋を浮かべ、テーブルに置いてあったコ○コーラを、同じく何故か置いてあったスポイトで吸い、タツプリ蓄えたスポイトの先端をガジルの鼻の奥に容赦なく入れ、溜まった炭酸飲料を鼻の奥で解放する。

「いだっ！ いだだ！ ば！ 止めっ、止める…ごほっ！ 止めてくださッが！」

涙目で抵抗するガジルに何故かキュンを来たシグナムは、満足に頷きスポイトを抜き取る。

まさに虫の息、涙目でむせ返っているガジル。

「で、でめー…一体なんの恨みがあるってんだ！」

「私の出番が無かったと言っているんだ！」

「こんなこととして良くも抜け抜けとオ…！ 俺だつてなア！ この回ずっとインストラクターだったんだぞ！ もっとう…ハードボイルドな探偵をしたかったのに…お前に分かるかこの虚しさGA！」

「知るか！ 何で私を誘わなかったんだ！」

「これは俺の仕事！ 何故お料理しに来てるおっぱい魔人を仕事に付き合わさなきゃならんだ！」

「あ……す、すまん……」

「きゅ、急に謝まんなよ……俺も悪かったって……お互い様だ、お互い様……」

あ、ほんと鼻に炭酸飲料は本気で止めて」

いつもの通りだな、と反対側のソファで頷くアギト。
その視線は二人からテーブルへと移る。

テーブルの上にはバラバラに分解された謎の機械と、丁寧に並べられた部品。

その傍らには難しそうな分厚い本。因みに、これが今回の依頼の報酬で、何でも機械の書物らしい。

何かを作っているのかと聞くと、物が透けて見えるって素晴らしいよなア、という危険極まりない答えが帰って来る始末。

決闘に勝ったユーノは無事結婚を認められ、来月には式を挙げる予定らしい。

「……それに比べてこの二人は」

アギトは、どう転んだか先程よりデットヒートしている二人を見て溜め息をついた。

依頼No.5 ガーちゃん（前書き）

どうもドナドナです！

腕も治りかけてテンションとモチベーションが上昇中の筈が…更新できていないorz

しかも今回はvividより新キャラ、ジークリンデさんを入れたり等…

書いている最中で、アレ？こんな感じで良いのか？等と深く考え込んでしまったり…漫画で楽しんでいる僕には資料が少なすぎたりとかで…

特に依頼No.5は、今回は戦闘描写皆無なのですが、後半ドロドロの戦闘になりそうで…

書いている最中何度も力不足を感じましたが、どうぞ

依頼 No. 5 ガーちゃん

早朝。人氣が元々少ない事務所前の道は、いつも以上に人氣が無く、道を行くものは一人二人。

新聞配達の子供か何かか、こんな早朝からご苦労なものだ。

そんな事務所前に、フードを深く被った少女が、事務所を眺めるように佇んでいた。

フードと、長い髪により隠された瞳には、決意にも似た輝きがあり、そのふつくらとした唇は寒さのせいも、少し乾いている。

「よし……よし」

少女は自分に言い聞かせるように何度も言葉を発し、覚悟を決めたか事務所へと続く階段を登り始めた。

足取りはぎこちなく、やけに緊張している。

階段を登り切った少女は、震える指で玄関へと続くドアに設けられた呼び鈴を押す。

呼び鈴にしては、少々間の抜きの音がドア越しに響く。

「あいあい、今出ます」

呼び鈴が響いてから十数秒後、やっと事務所の主の声が少女の耳に入ってきた。

少女はもう一度フードを深く被り、ドアの鍵が解かれるのを待つ。

少し古びたドアが開け放たれ、事務所の中から、凜としたたたずまいの男が現れた。

たたずまいだけではなく、その瞳も静かで力強い。服装もしっかりしており、しっかりとした性格の持ち主だと少女は思った。

それが少女の第一印象。そう、第一印象である。

「何か、御用ですか？」

微笑みながら、甘い言葉を発する男。その優しい顔と、甘い声に少女の顔が少し朱に染まる。

幸いフードで隠れてはいるが、少女はどう反応していいかが分からない。何度も心の中で練習した言葉が口から発せない。

「緊張しないで、ほら、言ってごらん」

「あ、あの……」

震えた声が響く。男は微笑み、言葉を待つ。

その顔は慈愛に満ち溢れており、少女は自分の心臓の鼓動が徐々に早くなっていることに気づく。

「……お客様か？」

凜とした声が少女の耳に入ってきた。今度は男のものではなく、女性の声。

気づき振り返ると、そこにはピンク色の長い髪を後ろで結んだ女性が立っていた。

突然の出来事に、少女はあたふたと男の顔を見る。その顔は先程までの凜々しい顔立ちではなく、どこかバツの悪そうな顔をし、親の仇を見るような目で女性、シグナムを睨みつける。

「お前……おい、空気読めよ」

先程とはまるで別人のような声が響く。

「？ 何がだ？」

「いやだからさア…な？ この状況見て分からんか？ 俺、女の子と話してるんだぜ。この俺が、かなり可愛い女の子と、それをお前…鬼か」

「むっ、何故鬼なんだ。私はただ質問しただけではないか。それに、フードを深く被っているはずなのに何故かなり可愛い子だと判断した」

「馬鹿か、お前は馬鹿か。あのねエ、お前みたいな美女が俺の事務所に普通に出入りしてたら、十中八九、ああ、ご婦人なんだなあ、チャンスねーんだなあ、なんて気持ちになるだろうが。それに俺はフード越しでも可愛い子かどうか分かる能力があんの」

「貴様は一体何を言っている。理解できる言葉で説明しろ。…まあ大方、その子を口説こうとでも考えていたのだろう。誰が貴様になどトキメクか」

「んだとテメエ…こー見えても、昔は暴れん坊將軍とか言われてたんだぞ」

「黙れ独身。三十路になってからもウダウダと…少しは危機感というものを持て」

「黙りな独身。テメエもそろそろ嫁入り考えないと、後でかなーり後悔するぞ」

突如始まった口喧嘩に少女は豆鉄砲と喰らったハトのような顔をす

る。

先程まで凜々しい人だと思っていた人の豹変。魚が空を飛べるようになったとかそんなキヤチな変化じゃねー、もっと恐ろしいものの近隣を

「ケツ、まあいいや…もういいや…。待たせたなお嬢ちゃん。さ、中に入りな」

急に整えた服を崩し、土足で玄関に上がる事務所の主、ガジル。いや、よく見ると土足で上がったのではなく、素足で外へ出ていたのだ。

「……ちゃんと考えているっ」

小さな声でふてくされるシグナムは、当たり前のように事務所の中へ入っていく。

その後姿を見た少女は、呆氣にとられている場合では無いと靴を脱ぎ事務所の中へと入る。

事務所の中は予測と反し、しっかりとしており、部屋の隅に積み上げられている家宝もとい大人向けの雑誌が無ければ清潔感が溢れた部屋だ。

色々と残念な男だな、と少女は心の中で思い、ソファに腰かけたガジルを見る。

「…そんな哀れなものを見るような目で俺を見つめないで。さ、お嬢ちゃんも座れよ」

少女は戸惑いながらも来客用のソファに腰かける。先程までふてくされていたシグナムが部屋にいないことに気づいた

少女は、最小限の動きで部屋の中を舐めるようにして探す。流石にこんな男と二人きりは辛いのだろうか。

「で、こんな朝早くから俺の所にやってくるたア、何か依頼か？俺は美女または美少女または幼女にはサービスしてやるぜ」

「あ、あの…」

先程とは打って変わって、断然喋りやすい。心臓もかなり落ち着いている。しかしガジルのテンションに馴れていないのか、少々話しづらい。

「友人を探して欲しいんです…」

「友人？ てことは…人探しか」

コクリと頷いた少女を見たガジルは、メモを取り出す。

「ふむ…じゃあまずお嬢ちゃんの名前から」

「ジークリンデ・エレミア……」

「ジークリンデ・エレミア、か…なあ、俺に名前呼ばれるとき何て呼ばれて欲しい？」

「え？」

「呼ばれ方。ジークちゅわん、ジークたん、ジークさん、ジーク様、ジーク、の五つから選べるぜ。ちなみに五秒以内に答えられない場合は強制的にジークたんに」

「…ジーク、でいいです」

「トキメイタツ、良しじゃあ宜しく頼むぞ、ジーク」

ガジルが取り出した契約書にある程度目を通したジークリンデは、契約を済ませる。

隣の部屋で女の子の声が聞こえてきたが、ガジルは構わずジークリンデに質問をする。

「そんじゃ、まず友人の名前を教えてください」

「ヴィクトーリア・ダールグリュン。久しぶりに会おうと思って家にいったんやけど…」

「いなかった、と」

「…それで、一人で探して」

「いなかった、と」

コクリと寂しそうに頷くジークリンデは、脳裏にヴィクトーリアの姿を思い浮かべる。いつも自分に優しく接してくれる友達、その友達が急に行方をくらました。色々とジークリンデなりに探していたのだが、収穫は無し。仕方なく通がかかった怪しげな探偵事務所に足を運んだ。

「ヴィクターは、強いから…誘拐とかは…」

「ふむ、じゃあ携帯で連絡を……いや、実行済みかな。まあ、此処

に居ても何も進展は無い。今すぐにも出かけたいところだが、飯を食ってからでもいいか？」

時刻はやつと六時を回ったところだ。しかも休日という事もあり、ガジルは朝食をとっていない。コクリと頷いたジークリンデを見たガジルは、失礼、と言って台所へと入っていく。

「あ、ジーク。その様子じゃ、寝ないで探してたんだろ？ 朝食終わるまでくつろいでいてくれ」

確かに、寝ずに一晩中探し回った。しかし何故それが分かったのか。ジークは部屋の隅に置いてある鏡に自分の目を映し出す。

隈は出来ていない。疲れている表情も無い。何よりフードが顔を隠しているの、顔色を確認することは出来ない。だが流石に疲れた。ジークリンデはガジルの言葉に甘え、ソファアに深く腰をかける。

「お、卵巻き随分上手くなったな」

「あ、ああ！ 炒飯で練習したんだ！」

「あれ？ 関係なくネ？ ンじゃ、そろそろ出来上がりそうなのでアギト起こして」

「今日は休日だから、昼間で寝ているそうだ」

「…すっかりニートになっちまって。お前のニートが移ったk」

鈍い音が聞こえたかと思ったら、頭部にたんこぶを作ったガジルが朝食を運んできた。

朝食は三セット。先程の会話では一人分余計のはずだ。

「ジークも食ってけ。朝食もまだなんだろう？」

「えと、ソイ○ヨイで…」

「…若者よ、おコメ食べろ」

テーブルに置かれたのは健康的な朝食の数々。

味噌汁は湯気に乗せて香ばしい匂いを運び、その湯気と結びつくかのように炊き立ての白米から出るもう一つの湯気、その傍らには眩しい緑。丁寧^{ていねい}に切られた菜^{さい}っ葉^はの隣には、やや形が崩れ、少し焦げている卵^{たまご}巻き。

「卵^{たまご}巻きは、まあ気にするな。不味くない味だ」

「バツ！ ガジル！ 客に食べさせるなど！」

人事^{じんじ}とは言え、客の前で吞^の気に料理の練習をしている方もどうかと思う。

「おいおい、客は朝をソ○ジョイだけで済ませてきた腹^{はら}ペコさんだぜ。俺は美女^{びよ}美少女^{みせうじよ}幼女^{ようじよ}にはサービスを欠^かかさないんだ」

「だからと言って…」

「んなことよりさつさと食うぞ」

客が来ているのにのん気に卵^{たまご}巻きを作る方もあれだが…
これ以上長引かせても時間の無駄だと判断したガジルは、やや強引

に話を終わらせる。

少し戸惑うも、待たせては悪いと判断したシグナムは、そっとガジルの隣に腰を下ろす。

ジークリンデはそんな二人の行動に微笑を浮かべるが、他人を笑うのは失礼だと思い、視線を料理へと戻す。思えば最近の食事はあまり健康的ではないような気もしていた。

「そ、それじゃあ…お言葉に甘えて」

ジークリンデは箸を握り、感謝を籠めながら合掌。それに合わせるように、ガジルとシグナムも合掌をする。

まずは味噌汁だ。片手でお碗を持ち、温かい味噌汁で喉を潤す。味は深く、されどしつこくない。

「美味しい…」

「そうか、口に合って良かった」

ジークリンデの箸が次々と進む。味噌汁から白米、白米から菜っ葉、菜っ葉から卵巻き。白米と菜っ葉は見た目も味も素晴らしく、形の崩れた卵巻きもしっかりと味わえる。

あっという間。本当にあっという間に終了した食事。だがしっかりと満たされた胃袋。ジークリンデは再び感謝を籠めながら合掌をする。

ガジルとシグナムは、お粗末さまでした、と微笑みながら言う。

「さて、ジークの食事も終えたことだ。さっさと働きに行きますかな」

ガジルは卵巻きをパクツと口に放り込み立ち上がる。部屋の墨に行き黒いコートと財布を確保すれば準備は万端。事務所にはシグナムがいるのでアギトの心配は無用。必需品の大人向けの雑誌は今日は持っていない。

ジークリンデもガジルの行動に合わせて事務所を出るため立ち上がる。

「ガジル、夕食は何が良い？」

事務所の玄関に立った瞬間、客間からシグナムの弾んだ声が聞こえてきた。最近なにやらコツを掴んだ、料理のレパートリーが増えたと、少々ご機嫌のご様子。

「ワクワクするもの」

「ドラゴ○ボールか？」

「……………いや、流石にその返しは…うん、ないわ」

ジークリンデとガジルは客間から凄まじい勢いで飛んできた剣らしきものを紙一重で避け、やっと人気が増えた道へ踏み出した。

「で、その友人の知人に行方を尋ねてみるという手を取ったが…」

「盲点やった」

その手があったか、と感心そうに頷くジークリンデを溜め息をつきながら、ガジルは視界一杯に広がる見るからに豪華な学校に感嘆の息を漏らすガジル。

今二人が立っている所はSt・ヒルデ魔法学院の校門前。最近出来た学校で、最先端の魔法の学習や、魔法の発達などを行う学校である。

美しい学校に、隣で目を輝かしているジークリンデ。一方ガジルの瞳にはどこか哀愁が漂っている。昔を懐かしむような、大切なものを失ったかのような瞳。

やけに感傷に浸っている自分に失笑を浮かべ、響き渡るチャイムの音を拾う。

「丁度、昼飯頃だろう。挨拶するなら今が良いか」

「お願いします」

「あー…、そんなに畏まらなくても良い。敬語つてのは、敬うに語だ。俺なんかを敬ったって何の意味も無い。個人的な趣味もあるがやっぱり愛称で呼んで欲しいな」

「愛称？」

「そうそう、例えば……ガーちゃん、とか」

白い歯を覗かせて、下心満点の笑みを浮かべるガジルは、いつもより気持ち悪かった。やってしまったと心中自分を責めるが、これから来る目の前の少女が、何このおっさん気持ち悪い…と言うような

顔で見られることは変わらない

「それじゃ、改めてよろしく、ガーちゃん」

「俺はここまで優しい心を持った女の子に会ったことがあるだろうか…涙腺が」

ことも無かった。人生、何が起こるか分からないものだ。

思わず涙のダムが決壊しそうになったガジルは、先頭を歩き、来客用の玄関に備え付けられた呼び鈴を鳴らす。すると、モニター越しに眼鏡をかけた、いかにも教師といった雰囲気の方が呼び鈴に応えた。

『はい。どちら様でございますか？』

「私、ガジル・アルレッタと言う探偵です。少し調べたい事があるのですが…」

『探偵……あの、免許のようなものは……』

「ありませんが？」

『……念のため、住所と電話番号を』

「念？ アンタ今念って言ったか？ ってことはアレか、アンタは俺のこと疑ってるってことだな？」

『は、はあ……身分が照明できない以上……』

「黙って俺の名前、ヤッフォーとかで調べてみろや。まあそんなチ

ンタラしてる暇ねえーから早速入れてもらっぜ」

『あ！　ちょ、ちょっとアナタ！　管理局呼びますよ！』

「ケツ！　管理局管理局と！　自分で努力するって言葉を知らんのか貴様ア！」

いつの間にか言い争いに発展していったガジルを呆れたような目で見つめるジークリンデ。あのシグナムとか言う女性も苦勞しているのだろうな…としみじみ思いながらも、二人の言い争いを見守る。

『もしもオーし！　管理局さん！　今変な人が押し寄せて』

「てめえ…！　チツ！　わア…ったよ！　俺の安全性を確かめれば良いんだろ！　この学園に俺の知人のカリムって奴がいるはずだ、カリムに俺のこと聞いてみな」

ガジルの一言で、教師は厄介なことが起こった、とでも言わんばかりの顔を見せ、教師はガジルに一礼して画面からその姿を消した。やれやれと首を振るガジルに、隣から言い争いを聞いていたジークリンデが尋ねる。

「ガーちゃん、カリムって誰？」

「ん？　まあ、このガッコーに勤める昔の友人かな。五年ぐらい会ってないけど」

昔を懐かしむように言うガジルの言葉はどこか弾んでいる。きっと此処に来る事が分かったときから挨拶しようと思っていたのだろう。初めから彼女を尋ねに来たと言えば無駄な時間を使わずに良かった

ものを…。

数分経つと、来客用の扉が開けられた。綺麗な長い金髪を持った女性、ジークリンデの瞳を捉えた。笑みを浮かべながら挨拶されていることに気づいたジークリンデは、慌てて一礼をする。

「よう、久しぶりだな」

「ふふっ、久しぶり…背、高くなった？」

「俺はガキか、俺もお前もそんな歳じゃねーだろ」

「怒るわよ」

「流石に悪いと思った」

五年ぶりに会った友人の変わりない姿に、両者とも笑みを漏らす。玄関で話すのも何だと、カリムはガシルとジークリンデを校内へと案内する。校内の廊下はまさに純白、ゴミ一つ無いところから見て生徒指導の能力の高さが分かる。

「で、本題なんだがカリム…この学校に、ヴィクトリア・ダールグリュン、という子はいるか？」

「ヴィクトリア・ダールグリュン……待って、今調べてみるわ」

「頼む。俺とジークはヴィクトリア・ダールグリュンの友人を訪ねてみる。何か分かったら連絡を入れてくれ」

「分かったわ。…それじゃ、不審者だと思われないようにね」

「自信が無いな」

テンポの良い会話と、手続きを済ませたガジルは、ジークリンデを連れ長く続く廊下を歩き始めた。

この時、ガジルは心の隅で嫌なモノを感じていた。体調の優れ等では無い。もっと小さく、もっと恐ろしいもの。ガジルの人生が、何か不吉な事が起こると告げている。

「エロ本、持ってくれば良かったかな」

ガジルの卑猥な呟きは、珍しくスルーされていた。

依頼 No. 5 ガーちゃん（後書き）

シグナム「またか！ また私の出番は無いのか！」

ドナドナ「僕に言われまして…」

シグナム「貴様に言わなければならないんだろうがッ！」

ドナドナ「あ、後半、あると、思っんで…」

シグナム「…思う？」

ドナドナ「後半作ります」

依頼 No. 5 吞まれる足（前書き）

更新、誠に遅れました！

今回も次回に続くように書きましたので、腑に落ちないところもありますが、ご了承ください。
それでは、どうぞ！

依頼 No. 5 吞まれる足

「さてと、早速探しますか。できれば…その…女子寮ーとか、あったらね、そこから回っていいこうか？ジークの友達も女の子なんだろう？じゃあそっしょう駆け抜けよう」

「…」

ガジルは中庭の方に目を向ける。中庭では健全な女子高生が良い笑みを浮かべながら友達とキャッキヤしている光景が広がっていた。女子寮よりこちらの方が良いのかも知れないな、と予定を変更。

「ふーっ、何か興奮してきたー」

「いい加減せんと怒るよ？」

「大歓迎だ」

やや問題が有る返しを華麗にスルーしたジークリンデは、ガジルの後ろについていく。当然、二人の周りには、二人の邪魔にならないように野次馬が集まってきた。ただでさえ目立つ大男が廊下を堂々と歩いているのだ、集まらないわけが無い。目立つのは嫌いなジークリンデは、フードを深くまで被り直し、足取りを速める。

「全く、サインなら後にして欲しいな」

「ファン、いるの？」

「……………」

そうこうしている間に、中庭に到着。先程より賑わっているのか、生徒の人数が多くなっている。男子の割合よりも、女子の割合が更に増したことにより、ガジルの鼻息も更に増す。ここまで来ると流石のジークリンデも不快感を感じてきたのか、一步ガジルから距離を取る。

「よしよしッ、ちょっと行ってくるねエ！」

かなりテンションが高いのが余計に気に触る。そのうちキモイ、などと心の暴力を振るわれるのは目に見えているので、さっさと用事を済ませて欲しいものだ。

「おい！ ジーク、この子か？」

「離せおっさん！」

目尻に涙を浮かべながら、少女の手を引く大人。傍から見れば哀れ極まらないが、早くも当たりを引いてくれたので良しとしよう。ジークリンデは、大きく頷きガジルに歩み寄る。

「ハリー・トライベツカ、この子で間違いないんだな？」

「離せてこの　って、ジーク！？どうしたんだよこんな所で？」

ここまで来てやっとハリーの手を離れたガジルは、リーダーを帰せ、と後ろで叫んでいる女の子達の相手をすることに専念する。罵倒されている中、良い笑顔を浮かべているのは流石とでも言っておこう。

「ヴィクター、何処にいるか知らん？ 遊びに行く約束しとったんやけど、どこ探してもおらんくて……今、探偵さんに一緒に探してもらってるんやけど」

「あのヘンテコお嬢様が？ ……そーいや、最近見てねーな……」

「そっか……ありがとな」

「あつ、そーいえばあのヘンテコお嬢様、どこか行くとか自慢してたな……」

「ど、どこ？」

「……もつと、女子高生と……ああ、女の子をお……！ 嗚呼、良いラインだったなア……真夏だったら、こっ、汗がムワアってなって……それから……それから……！」

「はあ……じゃあここからは私だけでええよ。ガーちゃんは学校に戻って暇潰しとって」

「そうは行かない。君をこんな所に一人にするわけにはいけない」とてもない変態発言からの発言では、説得力は無い。とは言え、ジークリンデもこんな所では一人にはなりたくはない。

今二人がいるのは、都市ミッドチルダが誇る超がつくほどのセレブ街。視界一杯に広がる眩いばかりのイオンの光。やや薄暗いこともあり、その光には妖艶さが存在していた。

「良くパーティーとか、結婚式だとか、異国のお偉いさん方がいらしている街。ジークも知ってると思うが、ここはあまり良い噂は聞かない」

「うん。裏通りとかで、良く女の人とか、お金持ちが襲われてるって話、聞いたことあるよ。…ホントかどうかからんけど…」

「光には必ず影がつき物さ。照らされている部分が大きいほど、影の部分も大きくなる。きつと裏じゃ、こんなキラキラした風景とは正反対な、ドロドロしたもんが一杯だぜ。仕事でも何度も来てるが、大体厄介事だ。あんまり穩便に済むとは思わないでおけよ」

手をヒラヒラと振り、先を歩くガジル。ジークリンデは、ガジルから感じる違和感にも似た不安も抱きながらも、その背中を追いかけた。

ガジルの言うとおり、表通りは華やかにだが、顔を覗かせた裏路地の入り口はゴミや何かの亡骸が散らばっていた。猫同士の争いも、陽気な音楽にかき消される。

「…やっぱり、好かないな。生きてる気がしない」

「此処で悪さしたんか？」

「違うよ。悪さしたら、きつと此処でも生きてる気がするさ。俺が言いたいのはさ、”つまらない”ってこと」

「つまらない？」

「うん。此処はちつとも面白くない。俺は変わりもんだから、こんなところより、風に揺れる風鈴を眺めるほうが面白いんだよ」

キザな台詞を残したまま、ガジルはある建物の前で足を止める。何も言わずに止まられたので、ジークリンデはガジルの固い背中へ衝突。鼻を押さえながら、ガジルと同じように建物を見る。

「此処って……」

「さてと、お仕事はもうそろそろ終わりかな」

二人が見上げている建物は、一言で言うのなら宮殿。純白の作りで、門の向こう側には入り口を挟むかのように、大きな噴水が二つ。太陽が完全に落ち、噴水を彩るライトの光が輝きを放つ。

「よくテレビとかで見るだろ。偉い人たちが此処で酒とか飲んだり、踊ったりしてるの」

「うん。ヴィクターも、ここに？」

「多分な。此処にも俺の知り合いがいるから、管理局様に頼むより簡単に入れるだろうよ。もし此処にお友達がいなかったら、俺が君にしてやれることはない。管理局にも知り合いがいるから、今度はちゃんとした事件と捉えさせて、管理局に頼め」

「…無責任やな」

「ハッハッハ、笑ってくれてもいいぞ。探偵ってのは力がないんだ

よ」

笑いながらも、ガジルは此処にヴィクトリアがいることを確信していた。少なくともヴィクトリアはここに住んではないことは分かっている。これはジークリンデにも確認はとつてある。この街の目玉といえは此処だ。それ以外は外見だけが派手な酒屋、パチンコ、危ない店、そんな所だろう。それらがある場所も豪華な住宅街から離れている。

「大丈夫、きっと見つかるさ」

「……うん」

ガジルは大きく頷くと、宮殿の中に入っていく。ジークリンデも、ガジルの後を追う。

「でもえーの？ 私なんかのために……」

「ふつ、可愛い女の子の頼みとあらば……焼却炉の中砂漠の中ブルマの中……ってね」

「じゃあ此処におらんかったら「俺には何も聞こえなーい」……」

ジークリンデとの会話を切ったガジルは、受付にいたガジルの知り合いらしき人と話をしている。

その光景を見ていたジークリンデに、ふと疑問が浮かんた。

世界中のお金持ちや王族などが集まる此処、厳重警備などが敷かれていてもおかしくないところである。そんな所の、それも受付の知り合いに頼んだところで通してくれるのだろうか？

「いいだろオ！ 人と会いたいただけなんだからさア！」

「だからダメなんだってガジルつつあんよオー！ んな理由で会える日が来るときゃ、そりゃテロや反国家勢力のクリスマスだろオーよオ！」

「だったら俺がサンタクロースだ！」

「管理局に突き飛ばすぞ！？」

……どうやら失敗に終わったようだ。しかし何と品の無い。明らかに浮いている。

なんだか聞いているこっちが恥ずかしくなってきたのか、ジークリンドはガジルのコートを引っ張り、ガジルをカウンターから遠ざける。

「ガーちゃん、もうちょっと静かに……」

「品が無いのは生まれつきだ。……しかしまあ、一理有る。人が一杯集まってきたな。へっ、檻の中のチンパンジーにでもなった気分だぜ。手え振ってみようぜ、きつとバナナの変わりにお金くれるだろうよ」

「ちよつとガーちゃん、私等不審者みたいになつと って、手エ振つとる場合ちゃうで！」

「へーい！ そのレディー！ お美しいですなーチューとかどうですか？ ちなみに僕一回もしたことないんで、エスコートお願いします？」

「捕まってもおかしくない……ああ、嫌な音が聞こえてきおった……」
身の引き締まるような、捉えかたからすれば死神の足音にも似たサイレンの音。

辺りは、黒服スキンヘッドボーイズの皆さんが囲んでいる。その周りには興味を示した貴族やお金持ちが集まっていた。
ガジルは満足げに周囲を見渡す。捕まれば、まず社会的に殺されるであろう状況の中で、周囲を囲んでいた群集の中の少女に笑みを浮かべる。

「……こんだけ暴れりや大丈夫かな。じゃあなジーク、次に顔合わすときは豚箱の中でないことを祈ろう」

「ま、待つてガーちゃん！これから一体」

ガジルはジークリンデの言葉を遮るように、ジークリンデの肩を抱き寄せ、耳の隣に口を持ってくる。

まるで首筋に凶器を突きつけられたような感覚に陥ったジークリンデ。

「どんな理由があるにしろ、年頃の女の子が、踏み入れてはいけない場所もある。友達にも伝えときな」

言葉を聞いた途端、ジークリンデは心臓を鷲掴みにされたような感覚に襲われた。恐怖ではない、驚愕の色だ。

隠し通したはずだ。少しのそぶりも見せずに、完璧といっても過言ではなかったはずだ。

「残念だったな。探偵は”カン”ってやつが命なのさ」

デコを人差し指で、ツンと突かれたジークリンデは思わず後ろによるめく。

ガジルはそのまま指を、ジークリンデを隠していたフードの添え、そのフードを剥がす。

ふわっ、と丁寧に手入れされた長髪が宙を舞う。未だ驚愕の色が残る可憐な顔が、ガジルを捉えた。

「やっぱり、俺の美少女センサー是一片の狂いも見せなかったようだな。」

メリークリスマス。朝起きたらきつといいことあるぜ」

「ま、待って！ ガーちゃんって！」

「ただのサンタクロースさ！」

ジークリンデの眼がガジルの笑みを捉えた瞬間、ガジルは腰を低くし、飛びかかろうとしていた黒服の足を払い。出来た隙間に飛び込む。

周りに悲鳴が上がる。しかしそれも数秒の間だけであった。明日のビッグニュースの主演は、黒服達を捌ききり、外へと逃走したのだ。

「ジーク！」

呆氣にとられているジークリンデに、金髪の少女が走り寄る。ジークリンデは、高貴なドレスに身を包んだ少女の名を呼ぶ。

「ヴィクター！」

「ごめんね…、少し気になることがあって…連絡を入れられなくて」

「うつん。ええよ、私、てつきりヴィクターがあいつ等に捕まったかと……！」

「心配かけてごめんなさい……それより、あの品の無い男の人は……」

「……サンタクロース、やって」

「は？」

「美少女センサーは今日もバッチシ、ついでにヤナ予感センサーも決まってるな……」

はあ……と、大きな溜め息をついたガジルは、一目から逃げるように街の中を走る。

もうすでに黒服スキンヘッダーズの追跡は振り切ったものの、それとは別のやっかいな事に巻き込まれてしまった。

「足を突っ込んだのは俺だが……あーヤダヤダ、女の子を抱きしめてクンカクンカしてえゝなゝ」

そんな夢のようなことを思いながら蹴る地面はやけに重い。ガジルが走る裏路地、その入り口ともいえるゴミ溜りには、先ほどの黒服とは違う男達の傷ついた体が転がっていた。体には殴りつけられたことによって出来た傷跡が多数存在するものの、命に別状は

無い。

まるで拷問でもされたかのような服の乱れ、地面に散らばった携帯電話の残骸。

これらは全て、ガジルがやったものである。

「午前二時に港町でヤクの販売、か…… ったく、ジークも素直に言うておけばいいもののよオ、信頼されてないなー、ちよっぴしシヨツクだわ」

それもそうか、と自分の今までの振る舞いを思い浮かべ微笑するガジル。それと同時に、この事件には大きな悲しみがあること確信していた。ジークリンデが何故ガジルに隠し続けていたのだろうか、何故ヴィクトーリアと共に販売を止めようとしたのか、なにかきつと訳があるのだろうか。

そして、探偵の”カン”が、この事件から漂う危険な香りを嗅ぎ取っている。

「ふー…、シグナムに電話入れとこ」

これこそ管理局の仕事だと、ガジルは走りながら携帯電話を開き、シグナムに電話をかける。電話をかけて僅か一秒、シグナムが電話に出たのかコール音が消えた。

よほど暇をしていたのだろうと、ガジルは呆れながらもシグナムに内容を伝えるべく口を動かす。

「あー、もしもシグナム？」

『…なんだ、もしもシグナムとは……？』

「中々斬新だろ。あ、言つとくけどガジルね、皆大好きガジルだよ」

『分かっている。で、何の用だ？ 私は今からアギトと一緒に風呂に』

「激しく良いな、俺も一緒に入りたい」

『っ……よ、用件はなんだ、はやくしろ』

「ん、そうだったな、実は明日の朝午前二時に港町でヤクの販売が
」

言葉が続けようとしたガジルは、突然、体中の毛が逆立つかのような感覚に襲われた。殺気と敵意が交じった気配、もはや狂気と呼んでもいいほどの居心地の悪さ。

ガジルは足を止め、口を閉じる。体中の神経という神経が研ぎ澄まされていく。風に揺れる葉の一枚一枚の響きすら聞き分けられるほどに。

「どーやら、とんでもない奴に会っちゃったみてーだな」

『おい、どうしたガジル！』

「そーゆー訳だ、頼んだぞ」

『待てガジル！ 一体何g』

ブツン、と携帯電話の電源を切り、そつと振り返る。暗闇の中から金属をこすり合わせたような音が響く。

いる。この暗闇に包まれた一本道に、隠そつともしないその狂気、剥き出しになった敵意、押しつぶされるかのような殺意。

「おいおい本当に人間の狂気かよ、勘弁してくれ作り物のお化けは
大丈夫なんだが本物はダメなんだよ」

「……ガジル・アルタレッタ、だなあ？」

「人違いだね、俺の名前はボブ。ガジルなんてイかした名前は持つ
た覚えはないぜ」

「ボブウ？ 人違いだったかすまない謝る許してくれ」

「おいおい、そういう暇があるならさっさと消えてくれ、俺は肝が
小さいんだよ ツ！」

刹那、ガジルの目の前に迫った切っ先、本能的な動きで顔を右へ動かす。凄まじい勢いを保ったまま、西洋風の剣は空を切る。その瞬間、ガジルの頭部に衝撃と激痛が走る。

そのまま吹き飛ばされてしまいそうになるが、その勢いを利用し、体を反らしながら地面に手を付き、二本の腕で自らの体を持ち上げる。下半身を持ち上げる瞬間、左から迫った腕を右足の裏で受け止め、その衝撃を体を支える腕に移動、そのまま勢いに任せて体を回転。コマのような動きで、襲い掛かってきた男の顎に右脚を叩きつける。

男は壁に叩きつけられ、ガジルは後方へ吹き飛ばされた。男を叩きつける瞬間、ガラ空きになった体に蹴りを入れたのだ。

受身を取り、最小限の衝撃に抑えたガジルは、男へと目を向ける。

「…いきなり殺しに来るとは、品が無いな」

「お互い様だろお…」

「それを言われると、困るんだ」

男とガジルの額から、同時に赤い血が流れる。互いを睨みつけ、距離を縮めるため、同時にゆっくり歩き出す。

互いにペースを緩める事無く、歩き続ける。不気味な光景に、響いていた葉が、その声を止めた。

身長はガジルと同等だろうが、灰色のコートに身を包み、顔に深く刻まれた皺、生気の抜けた白髪、しかしその肉体は屈強で、二本の腕には両刃の剣が握られている。

「失礼した。俺と同じ二オイがしてな、つい手を出してしまった」

「まいったな、アンタと同じ二オイじゃ女の子にモテねーな」

歩みを続けた二人は、互いの間合いに入った瞬間、ほぼ同時に右足を地面に叩きつけた。響いた音が、狭い通路に反響してゆく。

音が消える頃には、立ち位置が逆さになり、ガジルの頬に血が、男の頬に痣が残されていた。

「……くつくつく……」

「くくく……」

互いの腕を確かめ合うかのように結ばれた視線、その視線が交じった途端に、二人の男は傷を残された顔に笑みを浮かべた。

路地裏の狭い空間に、狂気が溢れかえる。男のものと、ガジルのものの。

入り混じった二つの狂気を流すように、不気味な風が街を走った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9277u/>

魔法少女リリカルなのはStrikerS でいてくていぶ!!

2012年1月12日18時59分発行